

# 長野県埋蔵文化財センター年報

1985



塩尻市上木戸遺跡出土縄文中期土器(器台は想定復元)

財団法人

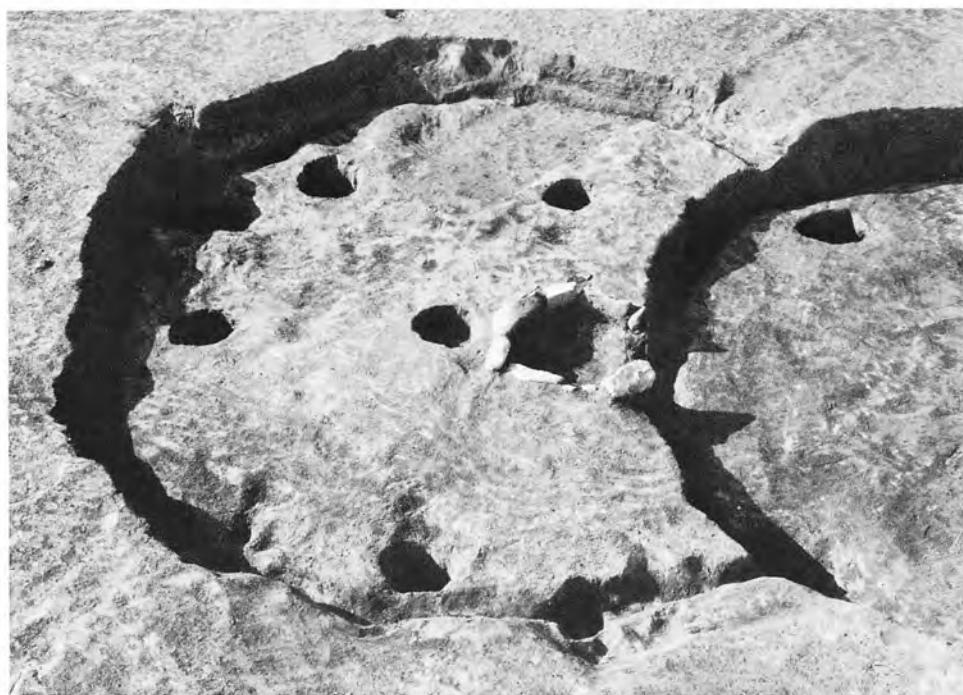
長野県埋蔵文化財センター



塩尻市吉田川西遺跡128号土城出土緑釉陶器(7点)・灰釉陶器(1点)(上)とその出土状態(下)



松本市下神(上)・塩尻市吉田川西(下)遺跡全景

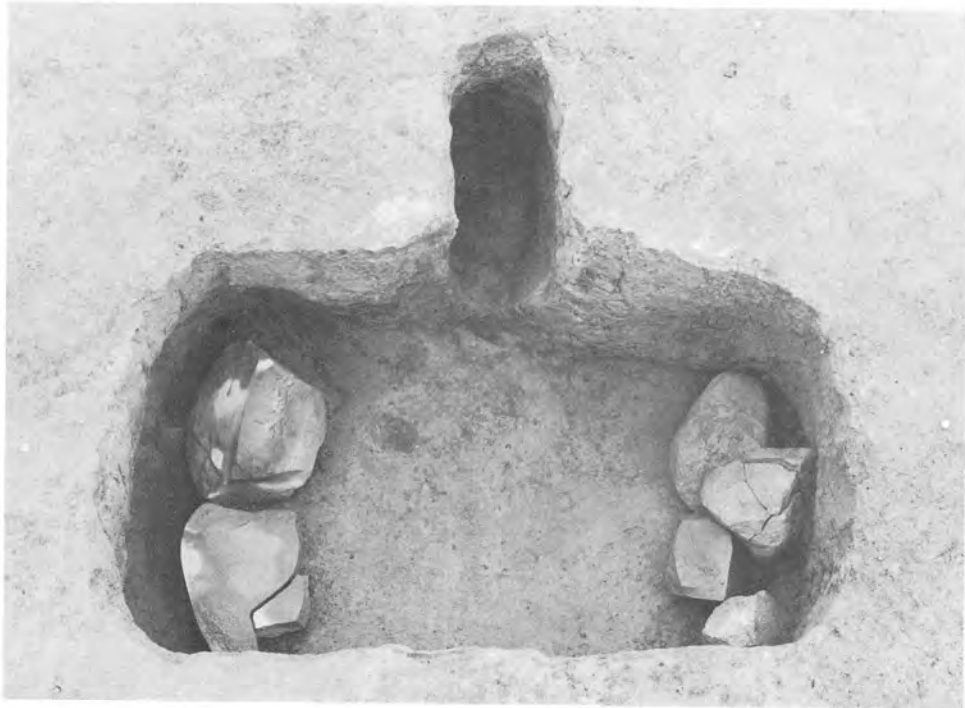
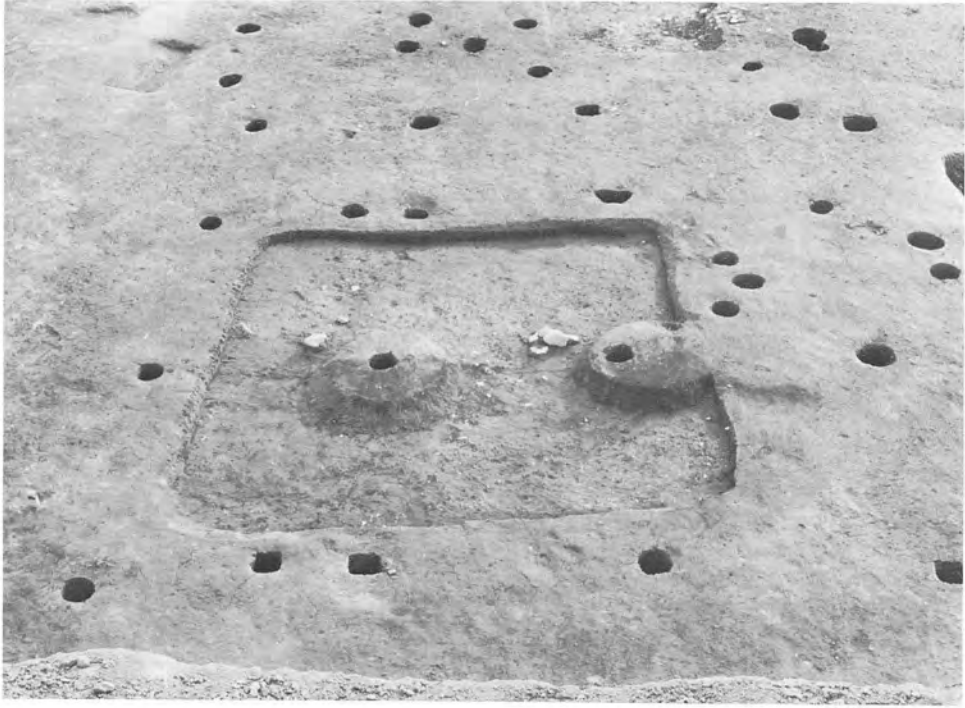


塩尻市上木戸遺跡104号住居址(縄文中期)(上)・同19号住居址(弥生後期)(下)





塩尻市吉田向井遺跡1号住居址出土土器(縄文中期)(上)  
塩尻市竜神平遺跡C地区1号住居址出土土器(古墳時代)(下)



松本市北栗遺跡(Ⅱ) 竪穴状遺構を付属する掘立柱建物址(上)  
松本市北栗遺跡(Ⅱ) 火葬墓(下)



松本市北栗遺跡(Ⅱ)竪穴状遺構出土松鶴鏡(上)  
塩尻市吉田向井遺跡174号土壙出土和鏡(下)



松本市神戸遺跡中部地区の中世水田址全景



## 序

中央自動車道長野線の建設は、県政の重点施策である高速交通網の整備の一環として進められ、その早期開通は県民のひとしく待望しているところであり、関連事業もその工事工程との調整を図りながら精力的に推進されております。この建設用地内にある埋蔵文化財の発掘調査も例外でなく、用地買収等の解決時期と工事工程のはざままで調査を進め、終了させなければならない厳しい現実に直面しております。

特に昭和60～61年度がヤマ場であることに鑑み、昭和60年度においては、職員を大巾に増員し、調査面積を当初の目標185,200㎡からその後県教委の遺跡範囲確認調査による拡大部分を加え、さらに、12月～3月までの厳冬期間も調査可能な日は調査を実施する等異例な対応をして、目標調査面積を上回る242,335㎡の調査を終了しました。

工事工程との調整のため、遺跡によっては、工事用道路部分あるいは公道、構造物との交差部分の優先的調査、用地買収にならない所謂残件部分を避ける調査等、コマ切れ調査となり、遺跡の全体像の把握に困難があり、効率的調査に支障があったのは否めない事実でした。

また、河川に沿った沖積地に位置する遺跡が多く、山麓部や洪積台地の火山灰(ローム層)の堆積している遺跡に較べて、土質の変化が微妙で遺構の検出に著しく困難を来しました。

一方、県内では画期的ともいえる広範囲にわたる条里遺構の調査にプラント・オパール分析の科学的手法を取り入れ、解明を急いでいるところであります。

このような調査の結果、住居址724、掘立柱建物址139、土壙4319、小竪穴42、集石9、溝149等遺構の検出と緑釉陶器7点一括出土、縄文中期渦巻装飾付台付鉢、硬玉製垂飾等々特筆すべき多くの遺物の出土をみたのであります。

また、普及活動としては、遺跡ごとの現地説明会はもとより、従来からの遺物をとりまとめ、塩尻・松本の両市において展示会を開催し、多数の方々の参観を頂き、大きな成果を挙げることができました。

これらの事業内容を中心にまとめたものが本書「長野県埋蔵文化財センター年報2 1985」であります。

この発刊に当たり、御協力を頂いた関係各位に対し、深く感謝を申し上げ、今後とも倍旧の御支援と御協力をお願い致す次第です。

昭和61年3月

財団法人長野県埋蔵文化財センター

理事長 村山 正

# 目 次

口 絵

序

目 次

## I. 発掘調査概要

1. 概要	1
2. 松本盆地内遺跡の地形と地質	6
(1) 概 要	6
(2) 塩尻市の台地	6
(3) 沖積地	8
3. 発掘調査遺跡	11
(1) 竜神遺跡(塩尻市)	11
(2) 竜神平遺跡(塩尻市)	13
(3) 山の神遺跡(塩尻市)	16
(4) 犬原遺跡(塩尻市)	17
(5) 上木戸遺跡(塩尻市)	19
(6) 吉田向井遺跡(塩尻市)	22
(7) 吉田川西遺跡(塩尻市)	24
(8) 神戸遺跡(松本市)	28
(9) 上二子遺跡(松本市)	31
(10) 中二子遺跡(松本市)	32
(11) 下神遺跡(松本市)	35
(12) 南栗遺跡(松本市)	39
(13) 北栗遺跡(松本市)	42
(14) 三の宮遺跡(松本市)	45
(15) 中原遺跡(塩尻市)	48
(16) 千本原遺跡(塩尻市)	48
(17) 高田遺跡(塩尻市)	48
(18) 南中遺跡(松本市)	49
(19) 上手木戸遺跡(豊科町)	50

## II. 普及・研究活動概要

1. 現地説明会	51
2. 展示会	51
3. 研究会・学習会	51
4. 刊行物	54

## III. 機構・事業概要

1. 機 構	55		
(1) 組織	(2) 事務所		
2. 事 業	55		
(1) 理事会及び会計監査	(2) 職員研修	(3) 普及活動	
(4) 調査事業	(5) 事業費	(6) 県内市町村及び団体の埋蔵文化財関連事業への協力 役員及び職員	58

# I 発掘調査概要

## 1. 概要

昭和60年度の発掘調査は、かつてない大規模なものであった。調査予定面積だけとって、24万㎡という膨大な数字で、新年度当初からこれを文化財保護の立場からいかに対応していくかが大きな課題であった。しかし、結果的には多くの問題点を残しながらも予定通り終了し、学術的にも大きな成果がえられた。まだ整理作業に入ったばかりであるが、別項3に各遺跡の概要をまとめてある。ここでは本年度調査した全遺跡を時代順に概観してみたい。

まず、本年度調査した遺跡の立地状況をみると、塩尻市に入る鉢伏山麓の畑地帯と、松本平南部低位段丘面である現水田地帯とに二大別できる。前者は縄文時代を主とし一部弥生・古墳・平安時代、後者はもっぱら平安時代が大部分で、それに縄文～弥生時代から中・近世に及ぶ遺構・遺物が検出された。この水田地帯については、昭和30年時代に故藤沢宗平氏ら一部の研究者に注目されてはいたものの、近年、ほ場整備に伴う広域的調査が松本市教委により実施されるまでは考古学的には不毛の地であった。むしろ、条里遺構の存在や古文献にみえる郷名比定などの面から、文献史学側のアプローチが目立っていた。ところが松本市教委の調査により、この地一帯が古墳～平安、時には中・近世に及ぶ相当規模の集落址が埋没しており、中には奈良三彩小壺・佐波理鏡・鉄鐸など注目すべき遺物があったり、また、最末期古墳が水田中から発見されるなど、にわかに新しい視点からの総合的究明が期待される状況となった。

当センターの本年度調査は、こうした状況を踏まえて実施されたが、予想以上の成果をあげ、一部では61年度調査へ継続されることになり、多方面からその研究成果が待たれている。

### 〔先土器・縄文時代〕

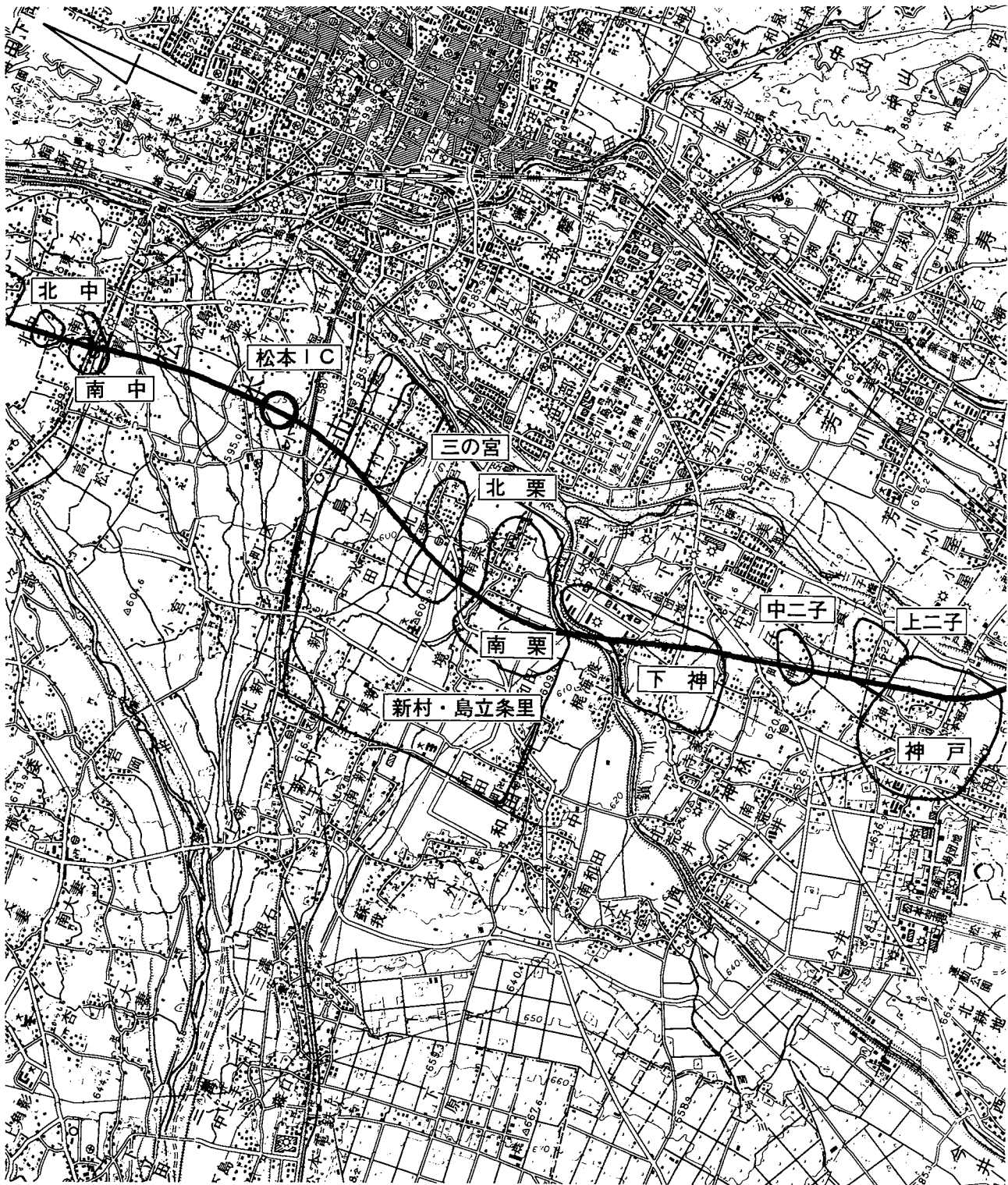
先土器時代は鉢伏山麓の諸遺跡に期待したが、山の神遺跡で黒曜石剥片のみのブロックが1か所検出されたのみであった。縄文時代になるとやはり中期が多く、上木戸遺跡の集落址は、台地縁辺の小範囲だったが、当地方独特の焼町土器と仮稱される火焰型土器に似た渦巻把手付台付鉢、5点一括土壙内から出土した硬玉製垂飾など注目される遺物もある。なお、松本平低地帯でも一部縄文土器片や石器が出土したが、問題を拡大するまでには至らなかった。

### 〔弥生時代〕

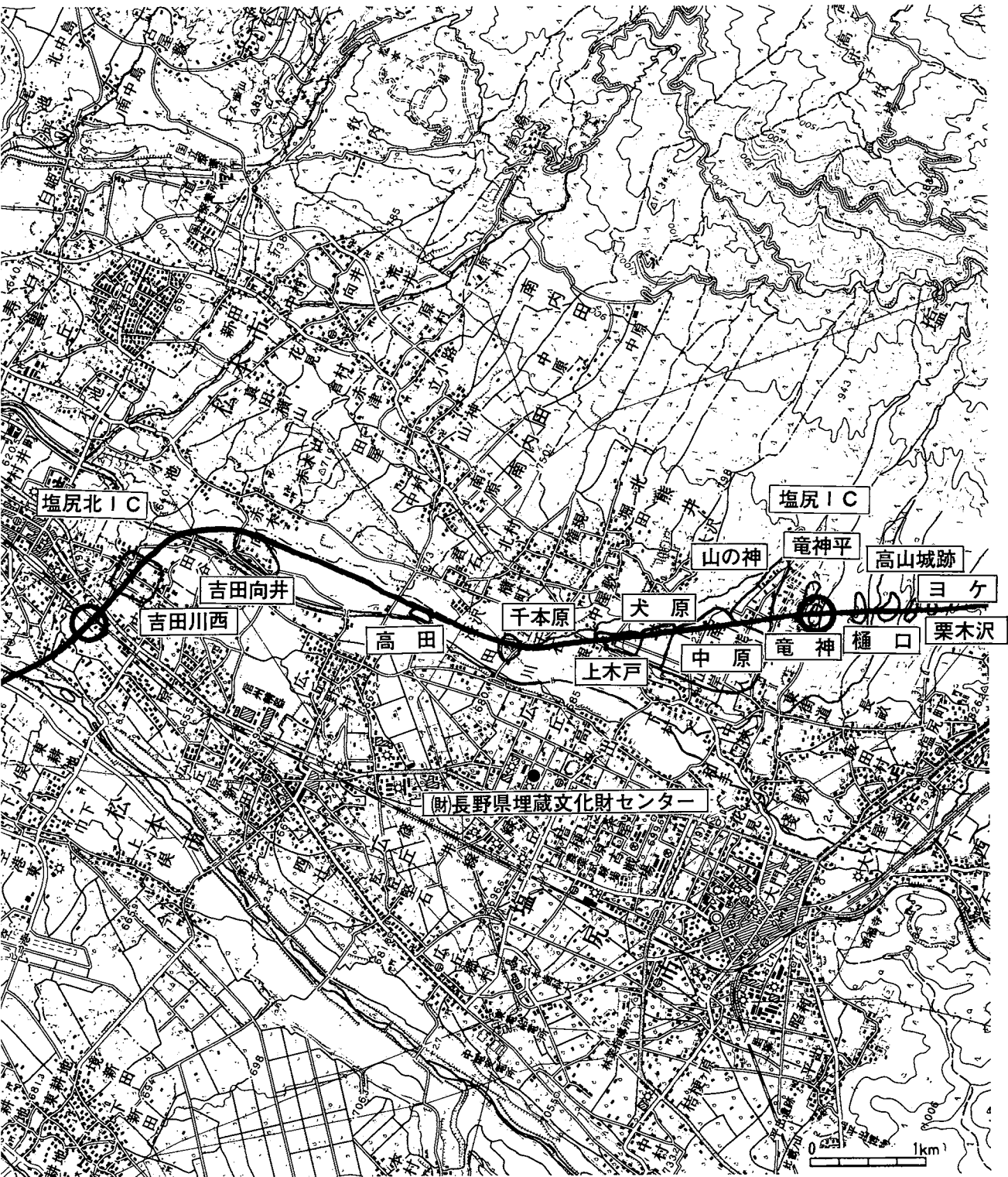
犬原遺跡の方形周溝墓、上木戸遺跡の集落址露呈は予期以上の成果であった。特にまだ疑問は残るが環濠の存在、東海系と在地系土器のあり方など興味もたれる課題がある。また1軒のみとはいえ低位段丘面の北栗遺跡で検出された後期住居址は今後へ問題を残そう。

### 〔古墳時代〕

山間地の竜神平遺跡で、土製模造鏡を含む祭祀土器のみ出土する住居址2軒が調査され、



第1図 調査遺跡分布図(1:50,000)(南安曇郡豊科町上手木戸遺跡は除く)





その性格づけが注目される。松本平低地部の諸遺跡では、ほぼこの期から散在的な集落形成が行われたことが確認された。南栗・三の宮遺跡での数軒の住居址は、新年度も周辺地域が継続調査されるので、該期以降集落との関連も含めて大きな期待が寄せられよう。

#### [奈良・平安時代]

山間地遺跡では特記する事例は少なかった。やはり低地部が中心でほぼ全遺跡が関連する。なかでも田川流域の吉田川西遺跡は、住居址 270 軒余という大規模集落址となり、出土遺物量も膨大で県下では稀有の遺跡となった。一辺10m前後の大型住居やその側壁に積まれたらしい皿を主体とした土師器約 300 個体の検出、緑釉陶器 7 点をほぼ完形のまま出土した土壙 128は、全国的にも注目を集めた。本遺跡はこの他にも全国初の「筆の穂先」(平安時代)や「縣」などの墨書土器、青磁・白磁を中心とした輸入陶磁器など、問題を含む遺物も多く、今後和名類聚抄記載の「良田郷」との関連など、考古学・文献史学両面から追究されるであろう。

一方、奈良井川・鎖川に沿う神戸遺跡から三の宮遺跡にいたる各遺跡は、上二子遺跡を除き、この期の集落址がほぼ確認された。中二子遺跡は、コンパクトな奈良末～平安初期の小集落址が露呈されたし、鎖川を挟んで南北に対峙する下神・南栗両遺跡は数期にわたるであろうが、200軒以上の住居址が密集し、新年度調査結果をふまえて、単位集団の把握など集落の構造的分析へ大きな期待がよせられている。これにつづく、北栗・三の宮両遺跡は、いわゆる「島立条里」地帯の中心部に存在し、今年度はカルバート・ボックス対応のためこま切れ状態の調査であったが、古墳時代から中世に及ぶ住居址や掘立柱建物址・土壙群などが検出され、一部で畑址や水田址も発見されている。この両遺跡は「条里」との関連追及を大きな目標としたが、本年度調査区域では充分解答をえられる部分がなく、新年度継続調査区域にかける期待は大きい。いずれにしろ、現時点での想定坪割区画線上の地下から住居址などの遺構が発見され、さらに集落址まで予想されることは、今後「島立条里」の成立や展開過程に再検討を迫ることは必至であろう。なお、こうした低地帯での集落址調査をふまえ、新年度は「松本平南部における古代集落の構造分析」をテーマに全員で取組むことになった。緊急発掘体制の中ではあるが、こうしたテーマ設定の調査は例がなく、いかに本地域が重要な意義をもつかが理解できよう。

#### [中・近世]

前代同様、低地帯各遺跡で掘立柱建物址・竪穴状遺構・土壙群などが検出されている。北栗遺跡の松鶴鏡・馬歯を共伴した土壙、伴出遺物は少ないが密集する土壙群や畑址が検出された三の宮遺跡、相当規模の掘立柱建物址を想定させる神戸遺跡、輸入陶磁器に多くの課題を提供した吉田川西遺跡など、新年度調査における集落址を中心とした生産域・墓域という生活空間全域にわたる相関関係を解明する鍵や、整理作業の結果により当時の政治・経済・社会は勿論文化全般にわたる考察を要求される種々の成果が期待されよう。

昭和61年度をもって、松本平の低地帯の調査は一応終了する。本年度調査分も含め、相当興味ある成果を提示できるものと考えている。

(樋口 昇一)



## 2. 松本盆地内遺跡周辺の地形と地質

### (1) 概要

松本盆地の地形・地質は、第三系・中生界・古生界から成る山地と、更新統(約200万～1万年前に形成された地層)から成る台地、および完新統(約1万年前以降に形成された地層)から成るいわゆる沖積地に大別できる。松本盆地を通る中央自動車道長野線に関わる遺跡の内、竜神～吉田川西遺跡は「台地」に、神戸～三の宮遺跡は「沖積地」に位置するため、以下、「台地」と「沖積地」に分けて地形・地質を概観したい。

### (2) 塩尻市の台地

塩尻市の東部を占める高ボッチ山塊は、中央高台とも別称される筑摩山脈の南部に位置し、鈍頂地形をつくって、太平洋と日本海の分水嶺の一部をなす。平地部は、松本盆地の南端部にあたり、犀川水系に属する。

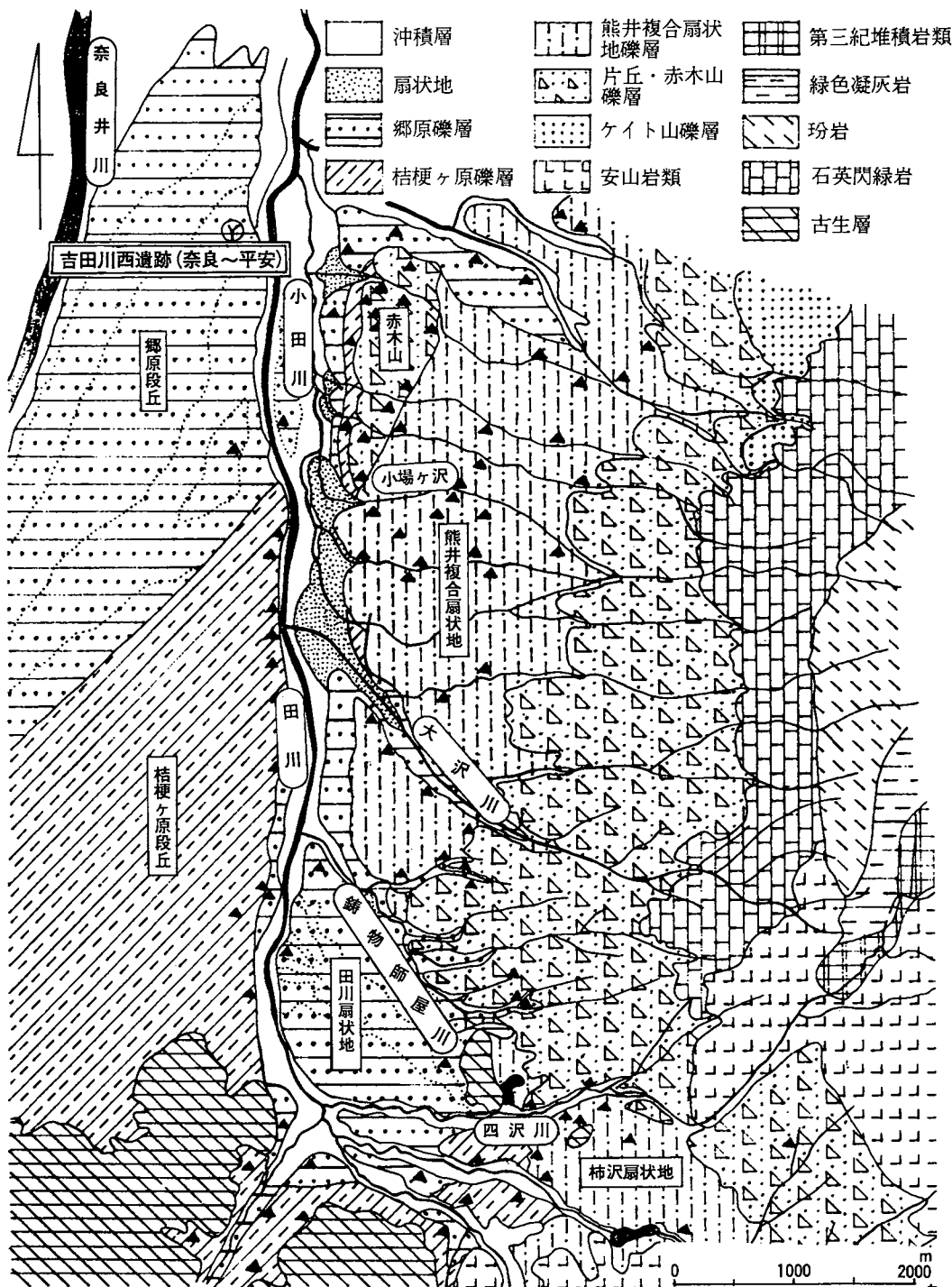
高ボッチ山塊の西麓一帯には、比較的急傾斜の崖錐性堆積層と、緩傾斜の開析を受けた扇状地堆積層が広がり、平地部では、更新世の扇状地が奈良井川・田川などの河川にうがたれて二段ないし三段の段丘を形成する。西麓の傾斜地域は、一般的に片丘丘陵と呼ばれ、小坂田付近から松本市寿地区にかけて、約2kmの幅を保って連続する。勾配は6～10度の斜面を呈して盆地に臨み、田川の低地を介して、河成礫層の桔梗ヶ原段丘(2.5万年前)、郷原段丘(1.5万年前)および沖積面と対する。

田川は、更新世末以降、盆地部の地盤隆起によって回春し、みどり湖湖畔付近から田川扇状地層を浸食して、同じく浸食をはじめた四沢川を合わせ、堀ノ内・棧敷にかけて開析扇状地の地形を示す。棧敷以北では、右岸から流下する鑄物師屋川・大沢川および他の小河川の扇状地層を切って、南熊井・北熊井などに二段の段丘をつくる。右岸の段丘崖下を北流していた田川は、歴史時代以降、大沢川・小場ヶ沢川などの押出しによって左岸へ押しやられ、桔梗ヶ原段丘・郷原段丘を切って河道を西に移動した。旧河道は、小田川の低湿地である。

この地形の形成は、約60万年前の更新世中期に高ボッチ山塊一帯が隆起を起こし、それに伴って、盆地部の沈降によって生じた南北性の断層に原因する。山地の隆起は急激に山肌を削り、崩落や小河川に運ばれた砂礫は、20～30mの厚さで丘陵地域を覆っている。熊井扇状地礫層・柿沢扇状地礫層は、更新世末(5万年前)の堆積である。堆積物は安山岩・玢岩・石英閃緑岩・緑色凝灰岩・砂岩・泥岩など第三系起原の角礫が主である。

その後間欠的な隆起によって、古い河流は開析谷となり、舌状の残丘地形を各所に残す。竜神平などの舌状台地はこれに当たる。

この地域は、全域にわたってローム層(火山灰)に覆われる。ローム層は小坂田ローム(6万年～3万年前)と波田ローム(2.5万年～1万年前)に区別される。小坂田ロームは、鑄物師屋川支流以南に分布し、厚さの変化に富み、北に薄くなる傾向が見られる。ローム質砂礫層か



第2図 塩尻市東部の地質図 (▲ 縄文時代中期を主体とする遺跡, ○ 微高地)

ら風化によるチョコレート色を帯びた部分を境にして、御岳山起原の白色軽石層を最下位に三層の軽石層をはさみ、粘性のある淡褐色のロームである。一方、波田ロームは、沖積層を除いて広範囲に分布する。暗色の風化帯を介在して小坂田ロームまたは段丘面・扇状

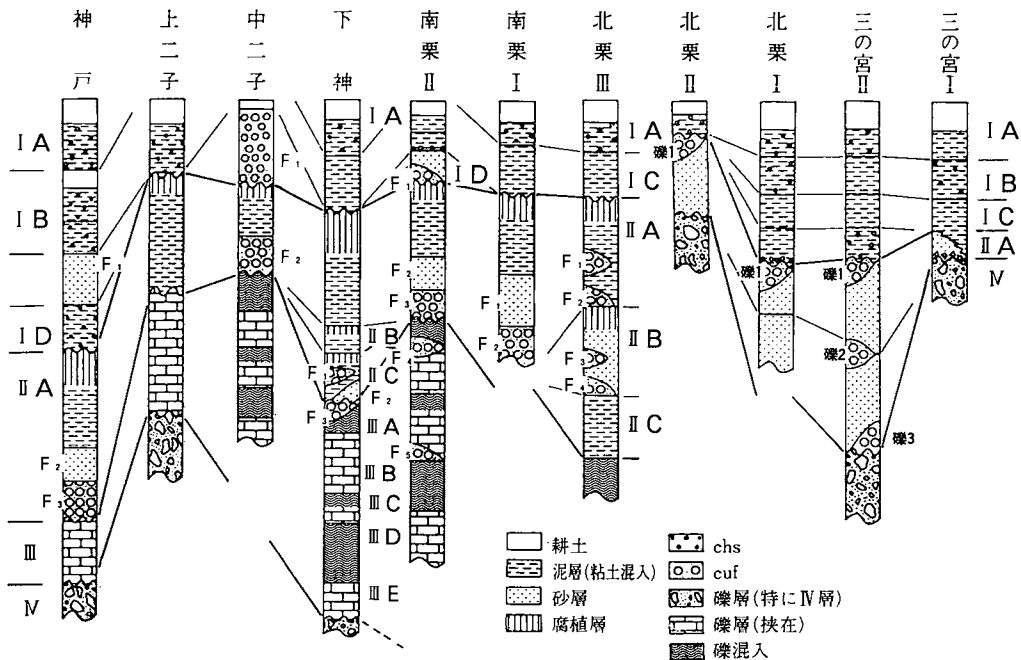
地面を覆う。乗鞍岳起原で層厚は2m前後をもち、鮮明な褐色を呈している。

中央道長野線は、柿沢扇状地・片丘丘陵の南端を横切って松本盆地に出る。路線には青木沢・八窪・御堂垣外・栗木沢・樋口・竜神平・山の神・上木戸・吉田向井・吉田川西など縄文時代中期を主体として、縄文前期から平安時代の各時期の遺跡が所在する。遺跡は、海拔680~800mの範囲に立地し、柿沢扇状地・熊井複合扇状地・赤木山平坦面・田川沿いの桔梗ヶ原段丘の段丘端などの各地に所在する。熊井複合扇状地域では、開析谷が残した微高地とその周辺の比高4~8m、海拔730~800mの範囲に広がり、生活水の求め易い場所に所在する。湧水は、崖錐層末端部・海拔750m等高線の上下部・扇状地末端部・赤木山東の凹地などに見られ、これらの湧水と幾筋かの河流水が遺跡の立地に大きく働いたであろう。

恵まれた湧水・河流水、乾燥地としてのローム層、安定した土地、日照の豊かな西向き斜面、後背地の広い森林帯等々、居住条件を満たし、生活を営む環境に適していたであろう。特に、縄文時代中期の集落地として開花したものと思われる。(関 全寿)

### (3) 沖積地

松本盆地のほぼ中央を北流する奈良井川以西は、波田・山形・岩垂原等の段丘を除き、東方または東北方へ緩く傾斜する地形を有する。すなわち、北栗付近を境に、南部は鎮川、北部は梓川による扇状地とみなすことができる。しかしながら、こうした現地地形の景観は、1万年前からの膨大な量の堆積物を伴う低地埋積作用の結果であり、歴史の一場面での地形とは必ずしも一致しない。そこで、各遺跡の土層観察より得られた知見をもとに、地形



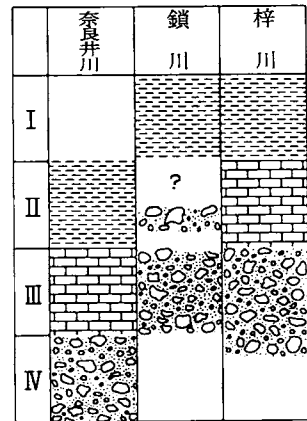
第3図 各地区基本層序



形成の過程を類推してみたい。

神戸～三の宮遺跡で観察される土層は、2系4累層に大別できる。最下部層の礫種等から、県道高綱線付近を境に北栗遺跡Ⅱ区以北は梓川系、北栗遺跡Ⅲ区以南は奈良井川・鎖川系と解釈でき、梓川系は下位より、淘汰の悪い巨～大礫から成るⅣ層、2部層の河川堆積の砂層から成るⅡ層、4単位の氾濫堆積の泥層から成るⅠ層で構成される。奈良井川・鎖川系は、Ⅳ層の巨礫層を最下部層に、上位へ砂シルト互層から成るⅢ層、3単位の氾濫堆積の泥層から成るⅡ層、4単位の氾濫堆積の泥層から成るⅠ層で構成される。

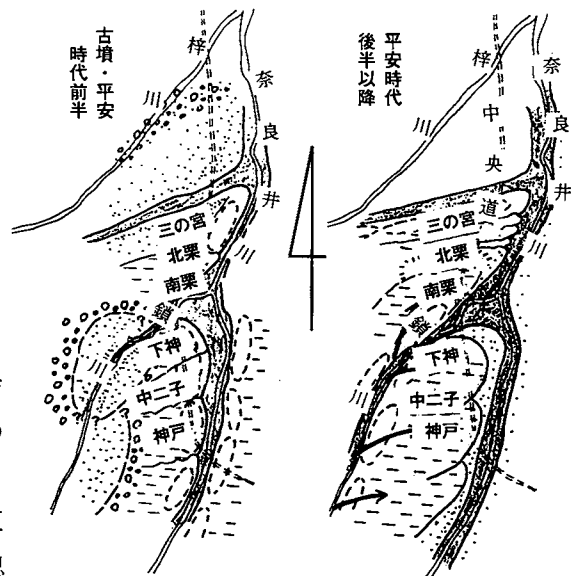
(第3図)



第4図 各河川の堆積傾向

この内、奈良井川・鎖川系のⅠ層は風化礫を特徴的に含み、波田～山形の一帯に広がる段丘を構成する波田礫層最上部の“クサリ礫”が、混濁流に取り込まれて泥流と共に堆積したものと考えられる。波田礫層を開析する河川に梓川と鎖川があるが、奈良井川・鎖川系の場合、風化礫を含む土層は、供給源を鎖川に求めて至当と思われる。とすると、Ⅳ～Ⅱ層が奈良井川による堆積物で、Ⅰ層のみが鎖川の堆積ということになるが、Ⅱ層やⅢ層のような砂や泥を堆積する環境にあって、明らかに外来の礫層が西方より指交する状況がしばしば観察され、多くの場合、この礫層には同化礫が含まれている。従って、鎖川はⅠ層の泥層のみでなく、以前に礫層を堆積していたことが解る。しかし、Ⅰ層ほど広域には分布しなかったようである。このように各河川の堆積物を粒度から観察すると、梓川系・奈良井川系共に、礫→砂→泥と堆積物を粗粒から細粒へ変化させる傾向があることが解り、鎖川系も、中央自動車道長野線内では砂層が観察されなかったものの、同様の傾向があると考えたい(第4図)。

ところで、本年度の調査で確認された内容の一つに、Ⅱ層上面が生活面として存在していた時期が古墳～平安時代と推定されることである。奈良井川系のⅡ層は、単位内の層相が河道から離れるに従って粗粒から細粒へと構成物質を変化させ、しばしば上面がなだらかな山形を成すことから、自然堤防を形成していたと考えられる。土層の連続性より、神戸～上二子遺跡付近、中二子～下神遺跡付近、南栗遺跡Ⅱ区付近に緩傾斜の微高地が展開したと思われる。また、Ⅱ層上面で厚い腐植層



第5図 地形形成過程

が観察されることが多く、当時、草木が一带を覆い蒼茫とした景観の中に、奈良井川に沿って点々と微高地が連続して集落が営まれ、後背地の小河川に沿った一带が生産域として利用されていたことが想像される。

梓川系のⅡ層は、梓川の北方への移動に伴って残された砂層と考えられ、北栗遺跡Ⅱ区付近より北側には北へ緩く傾斜する平坦面が広がり、三の宮遺跡Ⅰ区付近に旧梓川が東流していたと堆定される。従って、居住域や生産域の設定に関わって、奈良井川に沿った一带ほど地形に支配される可能性が低いはずであり、ここが「島立条里」と考えられていることに関連させると極めて興味深い内容である(第4図)。

Ⅰ層の堆積は、鎖川系・梓川系共にⅠD層という10世紀頃の氾濫堆積物の活動によって始まる。その後、中世～近世にかけて、規模の大小はあるものの、あたかも以前の地形を隠そうとするかのように数単位の氾濫堆積物が、低所を埋め時には高所を削りながら現在見られる地形を形成していったのである。特に鎖川系では堆積量が多く、奈良井川が作った自然堤防―後背湿地の地形を後背湿地側から埋め始め、ついには自然堤防をも覆いつくしてしまうのである(第5図)。

以上のように、各河川が礫→砂→泥と堆積物を変化させ、その時期が少しずつずれるという複雑さの中にあって古い地形が埋没し、現在見るような鎖川・梓川による緩傾斜扇状地が形成されたのである。この地形形成に、気候や旧地形、土木技術、政治的意図等が少なからず関わったはずで、特にそこにあった人間の営みを合わせて考察していった時、より興味深い事実が解明されるものと思われる。

(小口 徹)



第6図 松本市島立地区(北栗・三の宮遺跡)発掘状況

### 3. 発掘調査遺跡

リゅうじん  
(1) 竜神遺跡

所在地：塩尻市大字片丘字竜神11.023—11他

調査期間：昭和60年7月31日～同年9月9日

調査面積：12,200㎡

立地：高ボッチ山塊西麓の小高い舌状台地

時代と時期：縄文時代前・中・後期

主な検出遺構

時期	遺構	集石土城
縄文		2

本遺跡は高ボッチ山塊西麓の舌状台地に立地し、北側の沢をこえて塩尻市内が一望できる。台地は畑地となっており、発掘時にはすでに先端部と根もと部は削平されていた(第7・9図)。

確認された層序は、Ⅰ層耕作土、Ⅱ層黒褐色土、Ⅲ層ローム漸移層、Ⅳ層ローム層であるが、Ⅱ層は部分的に入るだけで、大半はⅠ層下即Ⅲ層となっている。

遺物は縄文時代中期のものが大半で、約400点余りをかぞえるが、いずれも小片であり、Ⅰ層耕作土よりの出土である。

わずか2例のみ検出された集石土城の礫はいずれも拳大以下で、礫を取り除くと、壁から底にかけて炭化物が層状に確認できた。伴出遺物はなかったが、周囲より縄文時代の遺物が出土していることから、その時代の遺構と考えてよからう(第8図)。

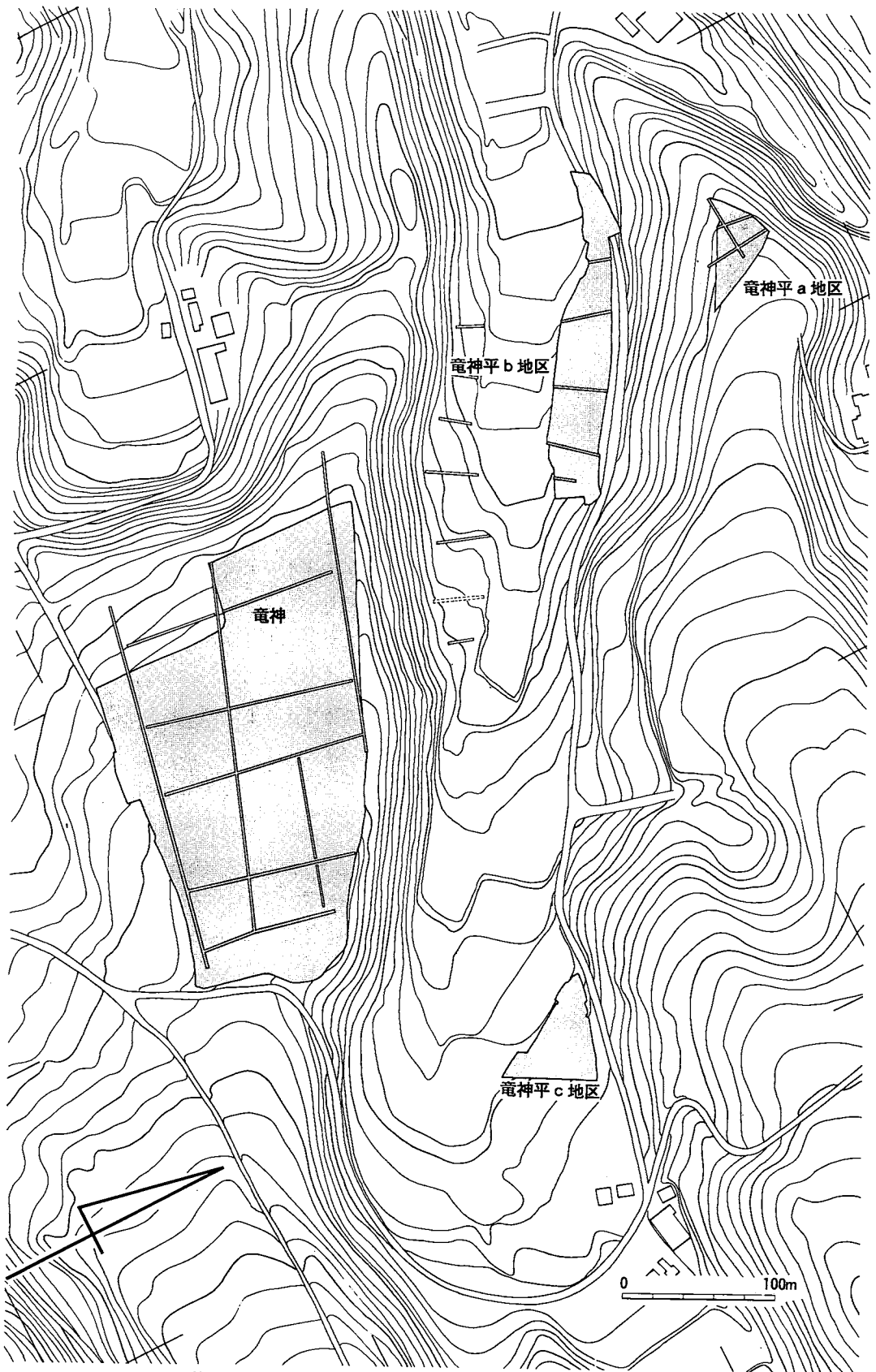
本遺跡は、見晴らしの良い台地に立地しているが予期に反してあまり遺構が発見されなかった。そのためこれら集石土城などが何を意味するのか、また、この遺跡がどのような性格をもっているのか、今後の課題としたい。(黒岩 龍也)



第7図 竜神遺跡全景



第8図 竜神遺跡の集石土城



第9図 竜神・竜神平遺跡発掘範囲と付近の地形(1:4,000)

(2) 竜神平遺跡

所在地：塩尻市大字片丘字竜神10.990—3他

調査期間：昭和60年5月17日～同年10月4日

調査面積：8,000㎡

立地：遺跡として認められた範囲は、地形的には台地部と谷部の大きく2区に分かれ、さらに谷部については斜面部と谷頭平坦面の2区に分けることができる。各区をa, b, cと仮称し、それぞれの説明を行う。

主な検出遺構

a 地区

時期	遺構	竪穴住居址	土壙
縄文(早)		1	
時期不明			3

b 地区

時期	遺構	竪穴住居址	竪穴状遺構	集石	集石土壙	火床
縄文(不明)				3	3	12
縄文(前)			1			
縄文(中)		1				
平安(後)		1				
時期不明			6			

c 地区

時期	遺構	竪穴住居址	土壙	集石土壙
古墳		2	3	1

a 地区

a 地区は、南北を沢によって切られた舌状台地が西に向ってなだらかに傾斜する尾根上に立地する。層序はⅠ層耕作土のみで、耕作土もローム層まで掘り込み利用されている。遺物はⅠ層中、住居内と住居周辺より縄文時代早期末の土器片、チャート・黒曜石剥片が出土している。径約3.5mの円形竪穴住居址は、耕作による削平のため西南部周壁は明確でない。土壙3基は伴出遺物がなく、時期は不明である。

今回は台地先端部のみ発掘であったが、本遺跡は台地中央部に広がりをもつと考えられる。また、本遺跡の住居址は縄文時代早期末の住居として中部高地にあっては貴重な一例となった(第10図)。(伊藤 隆之)

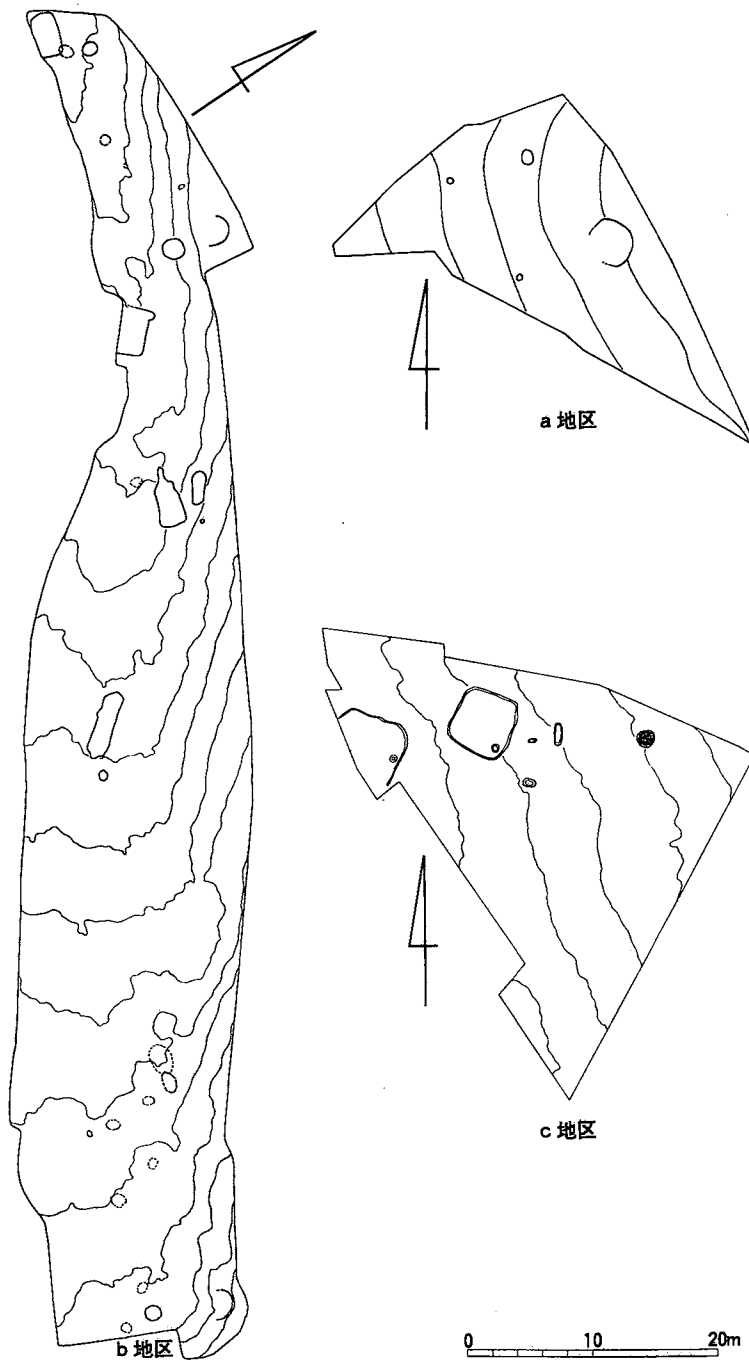
b 地区

b 地区はa 地区のある尾根の南側の谷に所在し、谷の中央を西流する沢により開析され、右岸と左岸に分かれる。トレンチ調査の結果、左岸では遺物の出土が少なく、遺構の存在が認められなかった。右岸では縄文土器片や打製石斧等が出土し、焼土も検出されたため、全範囲内の調査を行った(第10・11図)。

層序はⅠ層耕作土、Ⅱ層黒褐色土、Ⅲ層暗黄褐色土、Ⅳ層黒褐色土、Ⅴ層暗黄褐色土、Ⅵ層明黒褐色土、Ⅶ層黒褐色土、Ⅷ層黄褐色土である。Ⅲ層からⅦ層は縄文時代の遺物包含層で、特にⅢ層からは該期の遺物の出土が多い。

縄文土器では早期の押型文や条痕文、前期前半の土器片等の出土がみられるものの、主に前期後半から中期初頭が多い。土器片のⅢ層中での分布状況を見ると、前期後半が調査区の





第10図 竜神平遺跡各地区遺構分布図(1:600)

このように集石土壌や集石、火床は互いに深い繋りがあると考えられる。

ところで、竪穴住居址を除いた遺構群と付近より出土した前期後半～中期初頭の土器群とは同一検出面であることから、両者の繋りが認められ、住居をともしない生活空間と考えられる本遺跡の性格を究明する上で注目したい。(百瀬 久雄)

西側に、中期初頭が東側に多いことが確認され、時期の違いによって遺物分布に差が現れることがわかった。

縄文時代の遺構は大部分Ⅲ層中で検出され、調査区東端で中期中葉の竪穴住居址が1軒検出され、それ以外は、集石土壌や集石、火床等である。集石土壌は調査区東側に1基、西側に2基検出され、いずれも土壌の中は焼けた礫を含む5～20cm大の角礫で埋められていた。集石と火床は調査区の東と西に大きく2つのグループに分けられる。集石のうちで火床をともしない焼けた礫を含むものや、集石土壌の南1mの所に位置し、検出面がそれと同じものがあつた。

### c 地区

東西に通ずる狭小な谷を流れる沢の谷頭右岸の、南斜面に広がるわずかな平坦面に、遺構が検出された。いずれも5世紀前半に属し、該期に営まれた一時的な生活の痕跡(遺跡)と考えてよいと思われる。検出された2軒の住居はほぼ同大で、一辺4～5mの方形をなす。南東のコーナーに遺物を納めた一か所のピットをもつ点も同じである。2軒ともに出土遺物は高杯、埴、手捏土器(口絵)を主とする祭祀的色彩の強い遺物が大半で、日常什器は全くといってよいほどない。さらに、東側の1号とした住居内からは模造鏡と思われる土製品も発見されており、特記される。

住居区の東側に土壌群がある。この土壌の性格については不明であるが、遺物を含むものがあり、うち1基からは2個の高杯が出土

している。また、土壌中に拳大の礫を多量にもついわゆる集石土壌も1基検出された。礫中に遺物は全くないかわりに多量の炭化材を含んでいた。さらに礫をはずすと壙底より水が湧き出すという特殊な状況を観察することができた(第10・12図)。

以上、地形、住居と遺物の内容、周囲の遺構から、この地区が単なる日常生活の場所ではなく、何らかの祭祀の場ではなかったかという想定が可能である。5世紀末から6世紀にかけて、いわゆる祭祀遺跡が登場し、多くの石製模造品が発見される例がある。しかし、本遺跡のように多くの土製模造品が住居の中から出土するという現象は、そう多い事例ではないように思われる。当時の集落、祭祀形態を考える上で、示唆的な一例となるものと考えられる。

(三上 徹也)



第11図 竜神平遺跡b地区発掘風景



第12図 竜神平遺跡c地区住居址と全景

(3) <sup>やま かみ</sup>山の神遺跡

所在地：塩尻市大字片丘字犬原10,854—2 他

調査期間：昭和60年4月22日～同年8月5日

調査面積：14,800㎡

立地：大沢川扇状地のほぼ扇央部にあたる西向き<sup>の</sup>緩斜面

時代と時期：先土器時代，縄文時代中期

遺跡の特徴：先土器時代の黒曜石ブロック，縄文時代中期の集落

主な検出遺構

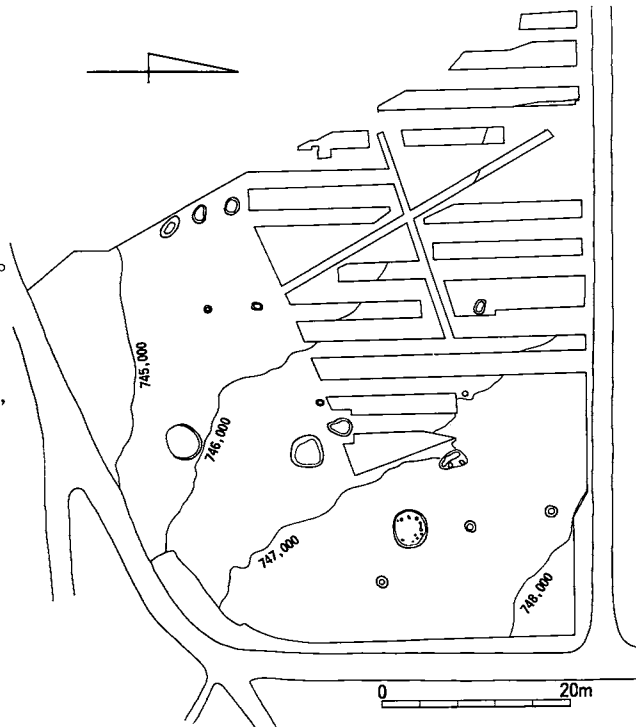
時期 \ 遺構	竪穴住居址	土壙	集石	火床	その他
先土器					黒曜石ブロック 1
縄文(中)	2	11	1	3	

主な出土遺物：黒曜石剝片・縄文時代中期中葉の土器・打製石斧・石匙・石鏃・石皿

調査区は2地点に分れる(便宜上、北区・南区と仮称する)。標高はいずれも746m前後を測る。大部分が畑地であり、長芋耕作による攪乱が著しかった。

北区は西面する広い斜面上に位置し、調査面積は10,800㎡である。調査区から東側にかけての<sup>一</sup>帯は、従来より縄文時代の遺物散布地として知られていたが、調査の結果、陥穴状の土蔵1基が検出されたほか遺構の存在は認められず、出土遺物も少量であった。また、ローム層中に黒曜石片が集中して出土する箇所(ブロック)があり、先土器時代の何らかの活動の跡として注目される。

南区は北区の南東約300mにあたり、南側が谷状に落ちこんで形成される台地状地形の縁辺部に位置する。調査面積は4,000㎡である(第13図)。検出された住居址は、いずれも径3～4mの円形もしくは楕円形を呈し、中央部に埋甕炉をもつ。ともに縄文時代中期中葉に位置づけられるものである。周囲には用途不明の土壙と火床が数か所検出されているが、出土遺物から住居址とほぼ同じ時期のも<sup>の</sup>と考えられる。該期にこの周辺に展開した集落の一部を構成するものであろう。(金原 正)



第13図 山の神遺跡(南区)全体図(1:800)

(4) <sup>いぬっぼら</sup> 犬原遺跡

所在地：塩尻市大字片丘字犬原10,761

調査期間：昭和60年4月22日～同年6月21日

調査面積：7,500㎡

立地：大沢川左岸の古扇状地性台地

時代と時期：縄文時代早・中・後期，弥生時代後期，中・近世

遺跡の特徴：縄文時代中期後半及び弥生時代後期の墓域

主な検出遺構

主な出土遺物

時期	遺構	溝	土壇	土壇墓	方形周溝墓
縄文(中)			6		
弥生(後)					2
時期不明	5	2	2	1	

土器：縄文早・中・後期土器・土師器

石器：石鏃・打製石斧

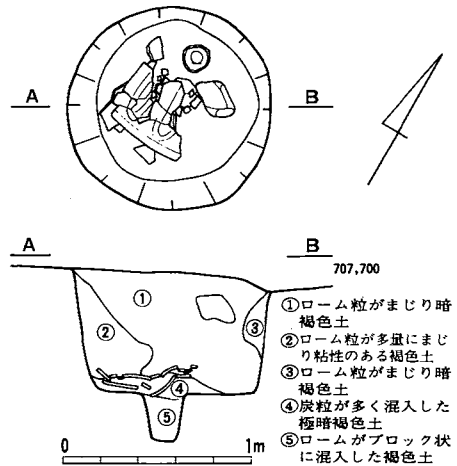
自然遺物：人骨

本遺跡は東山山地に源を発する大沢川が平地に流出する付近の左岸台地上に立地する。この台地は西側を北流する田川に、北東側を大沢川によって開析された古扇状地性の台地で、北西方向に緩く傾斜している。今回調査の対象となったのは台地の沢川に面した縁辺部にあたり、現況は畑地である。なお、大沢川の侵食により台地縁辺がゆるく出入りしているため、調査区は南・中・北の3地区に分かれる。

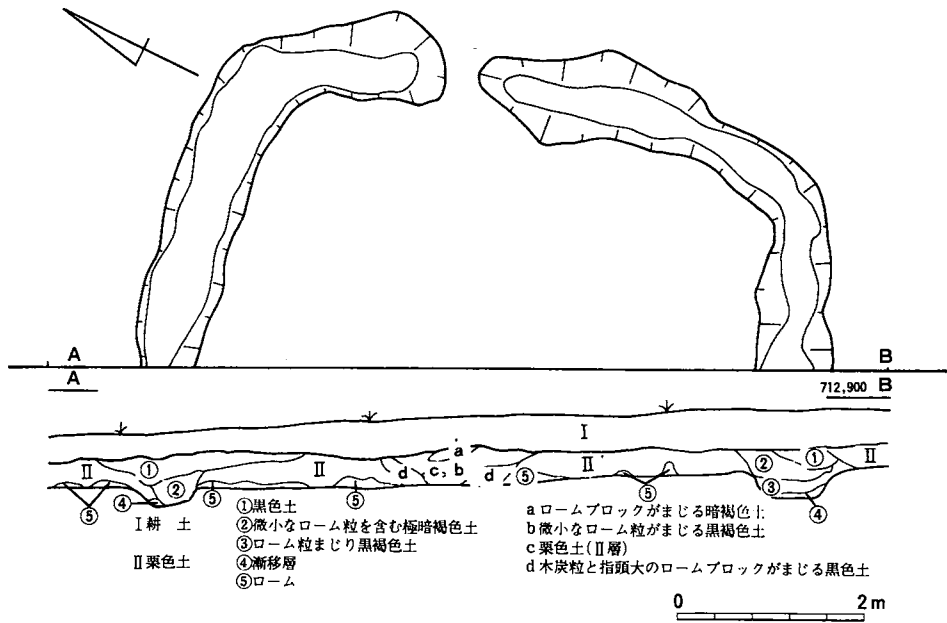
遺跡の基本的層序はⅠ層耕作土、Ⅲ層暗褐色土、Ⅴ層ロームである。Ⅲ層は南地区の一部と中地区にのみ分布し、上部から縄文時代後期土器、下部から早期押型文土器が出土している。

検出された遺構のうち8基の土壇は、径1～1.2mの円形プランで深さ約1m、平坦な壇底に1個体の土器を置き人為的に埋め戻された墓と考えられるものと、円形か楕円形に近いプランで壇底に小ピットをもち自然埋没した陥穴と考えられるものとに分類できる。特に3号土壇(第14図)は壇底に縄文時代中期終末の完形土器が口縁部を南に横位の状態で置かれ、さらに壇底に小ピットをもつことから、陥穴を土壇墓として再利用した可能性も考えられる。

方形周溝墓は北・中地区でそれぞれ1基検出された。ともに半分以上が調査区外にかかり全体像は不明だが、およそ1辺7mと推定される。中地区で検出された1号方形周溝墓(第15図)はⅢ層上面



第14図 犬原遺跡3号土壇(1:40)



第15図 犬原遺跡1号方形周溝墓(1:80)

から掘り込まれている。マウンドはⅢ層暗褐色土とⅤ層ロームが塊状に混じり合っており、周溝を掘った土をマウンドへ盛るといった構築法が推測される。主体部と思われた中央部の落ち込みはプランや立ち上がり不明瞭なことから後世の攪乱と判断した。ブリッジは東側周溝中央に設けられ、溝底よりなだらかに立ち上がっている。1号、2号ともに時期を決定できる遺物の出土はないが、本遺跡北部から隣接する上木戸遺跡にかけて弥生時代後期の集落址が見つかっていることから、弥生時代後期に属するものと考えている。

南地区で検出された1号土壙墓は、0.7m×0.5mの長方形プランで、長軸が南北方向に一致する。溝状遺構によって上部が削り取られており、人骨の一部も失われた可能性が強い。残存する下顎骨、大腿骨、上腕骨、頸骨の出土状態から、頭を北にして西を向いた横位の屈葬と推定される。副葬品はなく、所属時期は不明である。

溝状遺構は中地区で1条、南地区で4条が見つかった。これらは幅2m前後で浅く、壁の立ち上がりがなだらかで、現在の道路に沿ってのびるものと、幅約0.6mで砂礫の詰まったものの二種類がある。前者を道路址、後者を水路址と考えているが、時期の問題ともあわせて古地図との照合など行う中でさらに検討する必要がある。

なお台地下の水田面にもトレンチを入れてみた。層序は耕土下にⅡ層砂礫を含む黒色泥質土、Ⅳ層砂礫を含む二次堆積のローム、Ⅵ層基盤礫層であり、Ⅱ層の下部より偶発的に取り込まれたと思われる磨耗した土師器片が出土したのみであった。

今回の調査結果からこの地が縄文時代中期後半には狩猟空間及び墓域として、また弥生時代後期にも墓域として利用されていたと考えられる。従って該期の居住域と考えられている上木戸遺跡と関連づけてさらに詳しく検討する必要がある。(小林 俊一)

(5) <sup>うえきど</sup>上木戸遺跡

所在地：塩尻市大字片丘字犬原10.475—1 他

調査期間：昭和60年6月10日～同年8月29日，同年11月15日～同年12月6日

調査面積：3,250㎡

立地：田川右岸の古扇状地性台地先端

時代と時期：縄文時代中・後期，弥生時代後期，古墳時代初頭，平安時代前期，

遺跡の特徴：縄文時代中期後半と弥生時代後期，平安時代前期の集落

主な検出遺構

主な出土遺物

時期	遺構	竪穴住居址	溝	土塚	その他
縄文(中)		31		38	屋外埋甕 1
弥生(後)		16			
弥生(末)			3		
古墳(初)					
平安(前)		1			
時期不明			1		

土器：縄文中期土器・弥生後期土器・古式土師器・土師器・須恵器

石器：石鏃・打製石斧・磨製石斧・小型磨製石斧・凹石・砥石・石庖丁

土製品・石製品：土偶・耳栓・石棒・硬玉製垂飾・石製紡錘車

鉄製品：鉄鏃

塩尻市から松本市にかけて筑摩山地の西麓に発達した西に緩く傾斜する丘陵は古扇状地性の台地で，この地方でも特に遺跡の分布密度が高い地域である。上木戸遺跡はその丘陵が西を田川に，東から北にかけて大沢川に開析されてできた台地の先端部に立地する(第17図)。

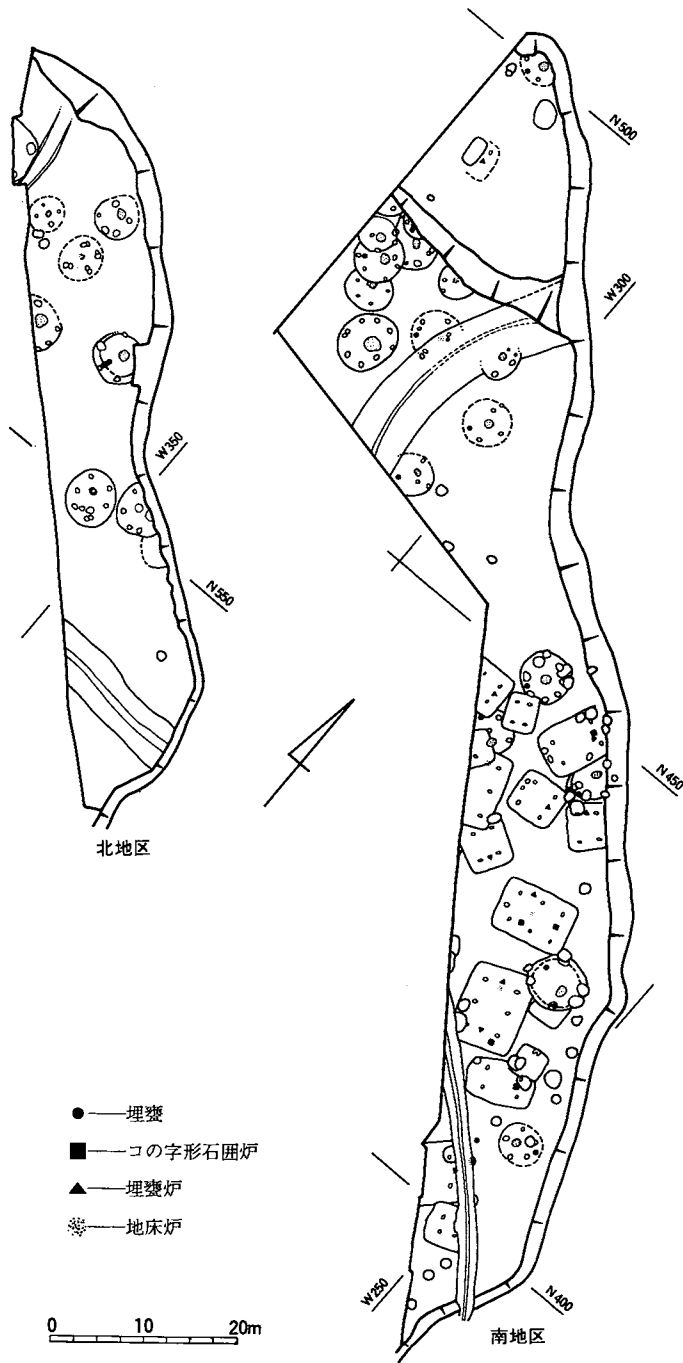
上木戸遺跡は住宅建設や道路工事の際に多量の遺物が出土しており，以前より縄文時代中期及び弥生時代後期の複合遺跡として知られていた。調査直前にも多量の土器・石器を表面採集している。

調査は遺跡の東側部分，中央道長野線の用地にかかる畑地3,250㎡を対象に行った。その結果，耕作土下ローム上面に48軒の住居址を含む遺構を検出し，縄文時代，弥生時代，平安時代の各時期に集落が営まれたことを確認できた(口絵)。

縄文時代の遺構は全て中期に属するもので，住居址は井戸尻式期2軒，曾利式期29軒で，この他土塚38基がある。このうち注目すべきは硬玉製垂飾5個を出土した29号土塚である。他にこのような遺物を出土した土塚はなく，また台地縁辺部に分布しほぼ円形プランを有する他の土塚に対して，29号土塚は台地の中央寄りに位



第16図 上木戸遺跡出土弥生土器



第17図 上木戸遺跡全体図(1:800)

住居址から出土した土器には千曲川水系に分布の中心を持つ箱清水式と天竜川水系に分布する中島式とがあり、さらには東海地方の影響を受けていると思われる文様や器形の土器もあり、その様相は複雑である(第16図)。

弥生時代末期から古墳時代初頭の遺構として3条の溝がある。巾2～4m、深さ約2mで断

置き楕円形プラン(1.4×0.9m)を有する点でも特異な存在である。なお5個の垂飾は長さが3～5cmと小形で、楔形に近い長楕円形をし、単孔であり、おおむね3個と2個の2群にまとまってほぼ同一レベルから出土した。

なお、復元可能なものを含めて多数の土器が出土しているが、31号住居址出土の渦巻把手付台付鉢(中扉写真)は台部を欠くものの器形・文様ともにあまり他に例のない土器である。また104号住居址床面出土の吊手土器は径3mm程の小孔を底に穿っており、その用途に興味もたれる。

弥生時代の遺構は、南地区に集中して住居址16軒がある。いずれも後期に属す。これらは形態や付属施設の違いから大別して、小形で隅丸長方形4本柱に地床炉または埋甕炉をもつものと、大形で隅丸長方形6本柱にコの字形石囲炉をもつものとがある。後者には複数の石囲炉や石囲炉のほかに埋甕炉や地床炉をもつ例もあり、また床面に土器製作用と思われる粘土塊の置かれた例が2例ある(第18図)。



面がV字形を呈する。覆土の上層は自然埋没を示し、下層は砂礫層があって水が流れたことを示している。その砂礫層からは縄文土器や弥生土器に混じって古式土師器の器台・高杯・S字状口縁台付甕などが流れ込みの状態が多量に出土している。最も長い1号溝でも30m程を調査できたにすぎず全容は不明であるが、1号溝はわずかながらカーブしており環溝の可能性も否定できない。

平安時代の遺構は住居址が1軒である。一辺4m弱の方形プランで北壁中央にカマドを

そなえ、土師器、須恵器のほか南東隅より編物石と思われる長さ10cm程の細長い礫10個余りがかたまって出ている。

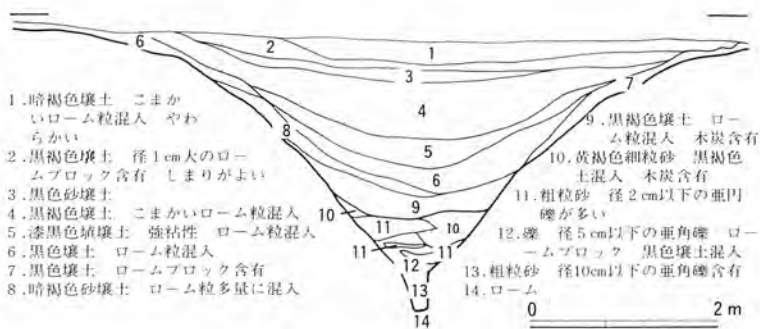
今回の調査では、縄文時代の住居址が調査区の全体から検出されたのに対して弥生時代の住居址は南地区に集中して見つかった。道をはさんで南側に接する犬原遺跡において、昭和44年の調査で同時期の住居址が見つかったことから、弥生時代の集落は南に広く展開すると考えられる。さらに今年度行われた犬原遺跡の調査では方形周溝墓2基が検出されており、時期を決定できる遺物の出土がなく明確さを欠くが、住居址と同時期のものととらえられるならば、集落と墓域の関連性が注目される。

溝と集落の関係については、溝と同時期の住居址が見つかっていないため不明である。今後の調査をまちたい。

(唐木 孝雄)



第18図 上木戸遺跡南地区全景



第19図 上木戸遺跡101号溝断面図(1:80)

よしだむかい  
(6) 吉田向井遺跡

所在地：塩尻市大字広丘字行人塚2,806他

調査期間：昭和60年8月26日～同年11月22日

調査面積：5,160㎡

立地：田川と小田川にはさまれた段丘性の微高地

時代と時期：縄文時代中・後期，古墳時代後期，平安時代後半期，中世

遺跡の特徴：縄文時代中期・平安時代後半期の集落，平安時代後半期～中世前期の墓域

主な検出遺構

主な出土遺物

遺構 時期	竪穴 住居址	掘立柱 建物址	溝	土壌	ピット	その他
縄文(中)	2			1		
古墳(後)				1		
平安(後)	9	2	2	50		
中世				26		土壌には火 葬竈4・地 下式倉庫3 を含む
不明				124	138	

土器・陶磁器：縄文中期土器・土師器・  
須恵器・灰釉陶器・青  
磁・白磁・内耳土器  
石器：石鏃・打製石斧・磨製  
石斧・石錐  
鉄製品：鉄斧  
青銅製品：和鏡・刀装具・銭貨

本遺跡は田川と小田川にはさまれた段丘性の微高地上にあり，現在の吉田向井の集落から北にかけて展開している。調査区は遺跡の東縁部にあたり，東端は小田川に面した比高2mほどの段丘崖となっている。また昭和57年の塩尻市教育委員会による調査区は，今回の調査区の北西約80mの位置にある(第20図)。

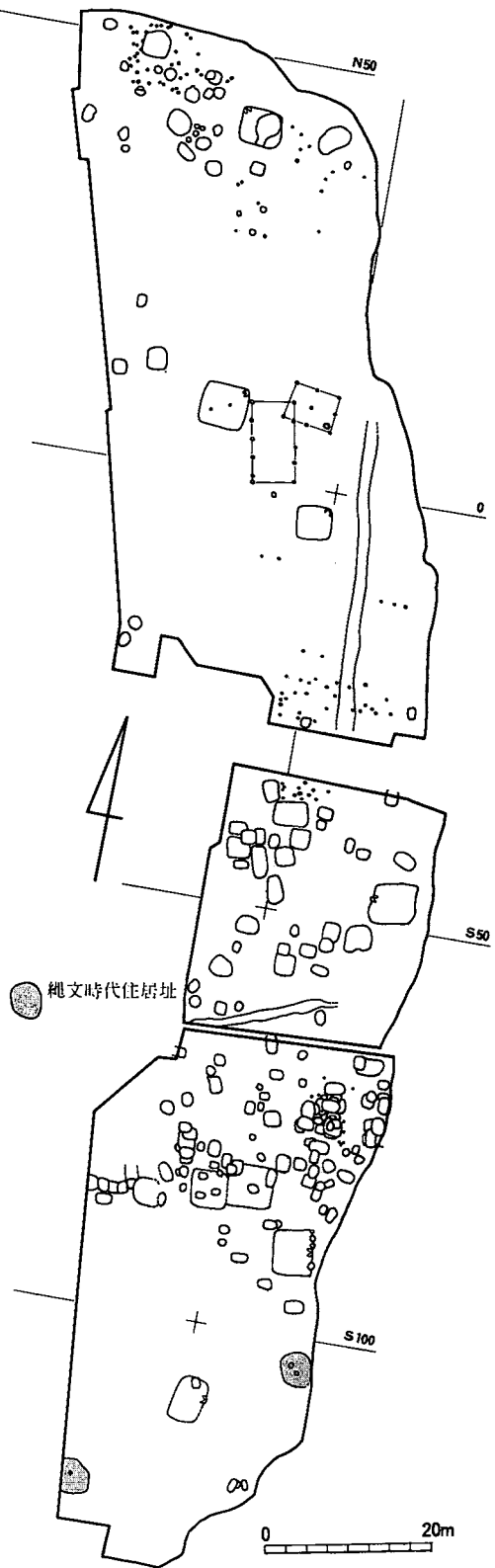
トレンチ調査等から確認された層序は，Ⅰ層耕作土(1～2枚の水田面が認められ，縄文時代から現在にわたる遺物が混在する)，Ⅱ層暗褐色土(平安時代～中世の遺物包含層)，Ⅲ層黒色土(縄文時代の遺物包含層)，Ⅳ層黄褐色砂質土(無遺物層)，Ⅴ層砂礫(無遺物層)である。土層の平面的な広がり，Ⅱ層が調査区南半，Ⅲ層が南端部で存在せず，一方Ⅳ層は南部でのみみられる。この南部は標高もやや高く，縄文時代の遺構の分布に地形的要因として強い影響を与えていると考えられる。なお，この微高地は現在の吉田向井の集落の南部へと続く。この北部は，北に緩やかに傾斜しており，平安時代から中世に及ぶ遺構が分布している。

縄文時代では2軒の住居址が確認された。1号住居址は，西半分が用地外のため未調査ではあるが，円形プランと推定され，中央よりやや北よりに石囲炉をもつ。住居内には床面から10cmほど浮いた状態で完形土器が10数個体出土しており，藤内Ⅰ式段階の良好な資料といえる(口絵)。3号住居址はほぼ円形プランで中央部に地床炉をもち，出土土器も1号住居址と同段階のものである。住居址の分布はさらに西方への拡大も予測され，田川河道の移動といった古地形の復元と関連させながら考察する必要がある。また縄文時代中期の遺跡としては低位段丘面に立地するといった特異な存在でもある。

平安時代については、塩尻市教育委員会の調査で85軒に及ぶ住居址が確認され、今回の調査でも多数の住居址の発見が予想されたが、調査結果は住居址がまばらに分布し土壌が多数存在するという異なったあり方を示している。住居址はすべて供膳形態の土師器と灰釉陶器が伴う段階のもので、羽釜も数軒で出土した。また建物址も該期に属している。調査区北半での住居址は北東か北西コーナー部分にカマドをもち、南半では東壁か西壁の中央部にカマドが設けられるという対比がみられ、時期差・単位集団のちがいとといったことも考えられ興味深い。さらに調査区南半では、住居址の分布とかさなるように平安時代後半期から中世前期に及ぶ土壌群が確認された。隅丸長方形のプランをもつ土壌が多数を占め、大きさも似かより、長軸の方向も東西か南北にそろうといった傾向がある。覆土中からは灰釉陶器・土師器・鉄製品・古銭の出土や、礫が密集する土壌も存在する。とくに174号土壌では和鏡(口絵)が出土した。この和鏡は縁よりの位置に鏡面から鏡裏にむけて角釘を打ちこんだと思われる穴があいており、その性格が注目される。土壌群は分布の濃淡・切り合い・軸方向・大きさ等の一致から、10数基がひとまとまりとなる小群に分けられる可能性もあり、土壌の占地・構築には当時なんらかの規制のあったことがうかがわれる。

平安時代以降については、塩尻市教育委員会調査分との総合的な考察が必要であり、ここでは集落の周縁部・墓域といった視点も必要であろう。また田川をはさんで隣接する吉田川西遺跡との関連も今後へのこされた課題である。

(望月 映)



第20図 吉田向井遺跡全体図(1:約900)

(7) 吉田川西遺跡

所在地：塩尻市大字広丘字三ノ口1,614他

調査期間：昭和60年4月22日～同年12月21日

調査面積：約9,700㎡

遺跡立地：奈良井川の一番低い段丘上

時代と時期：奈良時代，平安時代，鎌倉時代，室町時代，江戸時代

遺跡の特徴：奈良～平安時代の集落，室町～江戸時代の集落

主な検出遺構

時期	遺構 縦穴 住居址	掘立柱 建物址	礎石 建物址	土壙	溝	柵列	井戸	火葬墓	土壙墓	その他
奈良	1									
平安	271	8		340	22				1	
中世		7		118	8	1		4		
近世			4	3	2		1		1	円形竪穴2 池1

主な出土遺物

〔平安時代〕

土器・陶磁器：土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗・緑釉陶器・輸入陶磁器(白磁越州窯青磁)

鉄製品：刀子・鋤頭・鎌・鉄鍬・馬具・紡錘車・鉄斧・手斧

青銅製品：帯金具・佐波理碗・銭貨(富寿神寶，宋銭)・金銅製鈴

その他：木製砧・筆穂先・羽口・砥石・漆塗碗・漆塗盆あるいは箱・炭化米・トチの実

〔中世〕

土器・陶磁器：土師器，常滑・瀬戸・美濃系陶器・山茶碗・輸入陶磁器(白磁・青磁)

金属製品・その他：銭貨(中国銭)・石臼・石硯

〔近世〕

土器・陶磁器：土師器，唐津・瀬戸・美濃系陶器，伊万里系磁器

鉄製品・青銅製品：釘・燭台・銭貨(寛永通寶)

石製品：石臼・石硯

本遺跡では奈良時代から近世にかけての遺構が発見された。しかし連続的ではなく，途中何回か水田化されたりした空白期があり，遺構の時期には断絶が認められる。集落としてとらえられたのは，奈良～平安時代後期にかけて，室町時代後半，江戸時代の各期である(口絵)。ここでは平安時代集落を取り上げて概要を記し，その他関連する特異な遺構2例を紹介したい。

まず簡単に時期区分を行い，それに準じて集落の特徴を述べてみよう。現在整理があまり進んではいないが，出土した土器・陶器から以下のような時期区分が可能である。供膳形態を中心とした区分に従うと，

- I ヘラキリ技法による須恵器杯をもつ段階(奈良時代)
- II 糸切り技法による須恵器杯を主体とし、若干の黒色土器をもつ段階
- III 黒色土器が主体となり、若干の須恵器、灰釉陶器(東濃産光ヶ丘1号窯式、猿投産黒笹90号窯式)を含む段階
- IV 須恵器がなくなり、黒色土器が減少し、土師器が主体となり、前段階より多量の灰釉陶器(東濃産虎溪山1号窯式、丸石2号窯式)を伴う段階
- V 土師器を主体とし、黒色土器がなく、山茶碗を伴う段階



第21図 吉田川西遺跡付近(調査開始時の景観、手前が田川)

以上の5期に区分することができる。更に細分することが可能であろうが、大きな流れに変更はないと思われる。

遺構をみると、I期の竪穴住居址は少なく、後述する227号住居址のみである。II期より遺構数が増加し、IV期までこの傾向は続き、V期になると少なくなる。また、掘立柱建物址の数は少なく、規模の大きなものもなく、いずれもII～III期に属するものである。また、溝は集落を区分するようであるが、まだ整理の段階なので詳細は本報告にゆずりたい。この他、特殊な遺構として128号土塋があるが後述する。

遺物をみると前述の時期区分のところでも触れたもののほか、いくつかこの集落を特徴づける出土品がある。まず緑釉陶器であるが、128号土塋で一括して出土している(口絵)。このほか緑釉陶器片は遺構内および遺構外より多数発見されており、総数700点をこえ、器種も豊富で、時期的にはIII期に若干伴い、IV期に多数はいりこむ。次に輸入陶磁器をみると、越州窯青磁1点、邢窯白磁1点のほか、青白磁、白磁などが400点ほど出土しており、IV・V期に属する。これらは県内の他遺跡と比較して、内容的にも量的にも豊富であり、今後興味ある課題といえよう。

次に特徴的な2つの遺構について紹介しておこう。一辺10mほどの大型住居は2軒あるが、そのうちの227号住居址をまずのべてみる。

#### 227号住居址(第22図)

本住居址は調査区東部に位置する。プランは東辺中央に張り出し部をもつ一辺約10.5mの方形である。いくつかの遺構によって切られているが、主軸方向はほぼ東西を示す。埋土は2層に大別され、下層は複雑で人為的な堆積と考えられる。上層はレンズ状にその上に乗る。壁は検出面より約50cm前後を測り、南・西壁と東壁南部はほぼ垂直であるが、他は緩やかに立ちあがる。床面は平坦で、中央部から支柱穴のわずかに外側まで強くしまっている。

遺構内施設としては、張り出し部、礫列、壁溝、ピット、カマドがある。これらの中で、張り出し部と礫列は注目される。張り出し部は東壁中央部に設けられている。この張り出し部の



第22図 吉田川西遺跡227号住居址全景

平面形は方形で、壁を切りこんで床面より緩やかにたちあがっている。張り出し部の底面は、堅くしめられてはならず、地山がむきだしになっている。この張り出し部は緩やかに床面とつながっており、入口部として考えることが可能である。次に礫列であるが、これは拳大の大きさを主とする礫を壁際に並べたもので、北壁から東・南壁までまわる。これらの礫は床面の構築の際に入れられており、礫列と壁との間に溝がつくられている。このような例としては、県内では長野市塩崎遺跡、飯田市恒川遺跡がある。

ピットは、主柱穴4の他に補助的なものが8個検出されている。カマドは西壁中央部に構築されており、火床は住居内にかなりはいつている。石組みのカマドで、煙道は2本の柱穴の間を通過して長く住居外に延びる。カマドの石組は左袖が残っておらず、カマドに使用したと思われる石がカマドの前に散乱していた。

遺物はカマドの南側から床面直上およびやや浮いた状態で集中して発見されている。主なものとしては、土師器甕、底部ヘラキリの須恵器杯がある。

本址は張り出し部をもつ点、礫列をもつ点など構造として注目される部分がある。そして、この住居址は吉田川西遺跡の中で最も古い段階のもので、集落の成立を考えるうえで重要な性格をもつと思われる。

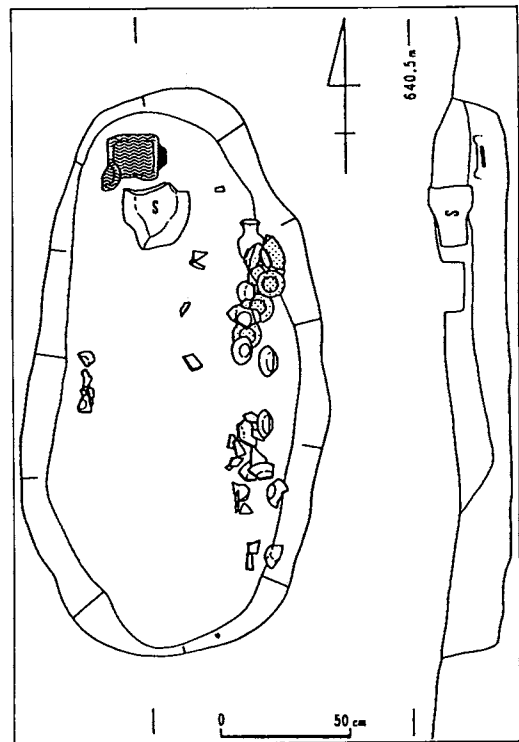
#### 128号土壙（口絵カラー、第23図）

南北（最大）220cm、東西（最大）119cmの長楕円形のプランをもつ。底面は凹凸は少なく、ほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ちあがる。砂礫層に掘りこまれており、覆土は2層に分けることができ、上層は砂礫を多く含み褐色土で、下層は暗褐色土である。北側の壁際には人頭大の石がやや浮いた状態で出土している。遺物は北側の壁ちかくに、漆塗りの椀、箱あるいは盆が出土しており、ともに木質部を失って漆のみが残り、この下より八稜鏡が出土している。緑釉陶器、灰釉陶器、土師器は東側の壁に沿って並べられているように出土した。北より、灰釉陶器のやや小型の長頸瓶が出土し、その南から緑釉陶器がまとまって重ねられた状態で出土している。器種は皿4、耳皿1、椀2であり、ほとんどが完形である。さらにその南からは土師器が

出土し、すべてが杯で、10個体ある。西壁沿いからは土師器の杯が2個出土している。

この遺構は、土壙墓と考えることができ、遺物はすべて副葬品と理解してよいだろう。東側の壁際には遺物が一列に並んだ状態で出土しており、中央部に空間ができる。棺がおかれていたのではないかと考えられる。このような状況で遺物の出土する土壙墓は何例か報告されているが、緑釉陶器を伴うものはみられず、本址に埋葬された人物は有力者であったと思われる。

本遺跡一帯は、和名類聚抄に記されている「良田郷」に比定されているが、今回の調査ではそれを裏づけるような資料の発見はなかった。従来、本遺跡のように多量の緑釉陶器や輸入陶磁器をともなう集落は、官衙的な性格をもつとされてきた。しかしここは、掘立柱建物の数が少なく、文献による記録、地名、墨書土器などでそれを想定させるものはない。まだ南北に大きく広がる集落の一部を調査したのみで速断はできないが、現時点では官衙とは考えられない。しかし、前述したようにこの集落にはⅢ期からⅣ期にかけて、多量の緑釉陶器、白磁などがはいりこんでいることも事実で、これらを連続して受け入れることのできる有力者層が、この集落に居住していたことも確かである。今後の整理のなかで更に検討していかねばならないが、彼らは平安時代後期において、在地で力をつけてきた新興の有力者層ではないかと思われる。今後、整理作業を行っていくなかで、集落の内容、性格などを明らかにしていきたい。



第23図 吉田川西遺跡 128号土壙(S=1:30)

○緑釉陶器 ■八咫鏡 □漆製品



(8) 神戸遺跡

所在地：松本市大字笹賀3,591-2他

調査期間：昭和60年4月22日～同年12月13日

調査面積：約39,840㎡

時代と時期：平安時代及び中世

立地：奈良井川左岸の自然堤防上

遺跡の特徴：平安時代の集落及び中世の墓域・居住域・生産域

主な検出遺構

遺構 時期	竪穴 住居址	掘立柱 建物址	柵列	溝	土 壙 ピット	そ の 他
平 安 (前半)	11				62	火床 1
平 安 (後半)	14	4				
中 世		11	2	5	679	井戸 2 配石 1 水田址

主な出土遺物

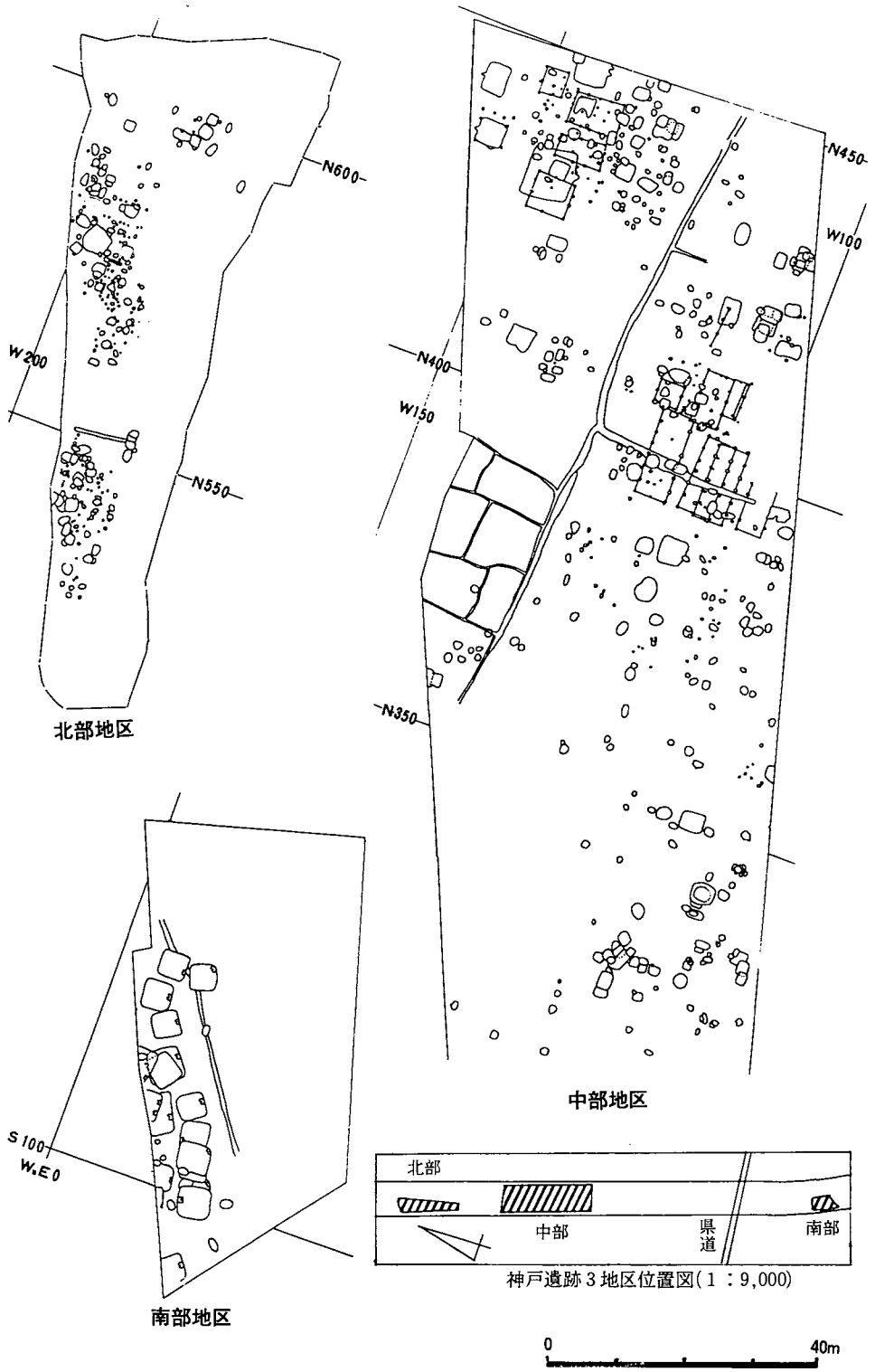
土器・陶磁器：土師器・須恵器・灰釉陶器・内耳土器・中世陶器・輸入陶磁器等  
鉄製品・青銅製品：刀子・鉄斧・鉄鎌・銭貨等  
石製品：石臼・石硯・砥石等  
その他：骨片

本遺跡は現在の神戸集落を含む一帯に広がる。今回調査した地区は、奈良井川と神戸集落の中間に位置し、遺跡の東端部とみられる。昭和59年度にトレンチ調査を行い、遺跡の概要把握につとめたが遺構は検出されなかった。しかし、旧河川と思われる礫層中から、ほぼ完形の須恵器などが検出されたため、付近に遺構があることが予想された(年報1参照)(第24図)。

本年度は遺構の全貌を把握するため、調査区全体に約20m間隔にテストピットを設定した。ここから確認された基本的層序は上位より、ⅠA層小風化礫を含む泥質砂(南部・北部)、ⅠB層細風化礫を少量含むシルト質細粒砂(中部・北部)、ⅠC層雲母を多量に含む黄色中粒砂、ⅠD層砂質礫～細粒砂(南部)、ⅡA<sub>1</sub>層褐色粘土混中粒砂、ⅡA<sub>2</sub>層黄褐色粘土混中粒砂、ⅡB層オリーブ色中粒砂、ⅡC層中礫である。

またテストピットによって、遺構の検出された場所、遺構は検出されなかったが遺構がありそうな場所にトレンチを入れ、その成果をもとに周辺を拡張した。遺構は調査区全域から検出されたが、その性格とまとまりから、以下南部・中部・北部に区分して概観する。

**南 部** 調査区の西端に遺構が集中する。平安時代前半の竪穴住居址7軒、後半の住居址14軒と掘立柱建物址4棟が確認された。なお時期細分できない土壙・ピット等も62基ある。平安時代前半の遺構はⅡA層上面で、後半の遺構はⅠD層中でそれぞれ検出された。それは平安時代前半の遺構が、微高地の東側を流れる自然流路による堆積物(ⅠD層)により埋没し、その後後半の住居が営まれたためと思われる。住居址群の東側は低地となっており、そこにはカマド石に使われたらしい花崗岩や遺物が、堆積物中に多量にとり込まれている。集落は水害にあ



第24図 神戸遺跡全体図(1 : 1,000)

ったことが認められるものの、間断なく営まれている。また、前半には限られた地域を占めていた居住区が、後半には北側に広がる点はこの時期に集落が発展したものと考えられる。

**中部** 平安時代前半及び中世の遺構が確認された。北西隅の微高地からは、平安時代前半の竪穴住居址4軒と土壌数基が検出された。該期の集落は調査区外の西側に続くとみられる。その後、鎖川の支流の氾濫による堆積物で平坦地化され、その上に14世紀から16世紀にかけて、墓域・居住域・生産域が形成されてくる。14世紀から15世紀にかけての土壌が、ほぼ全域にわたって分布する。竪穴状の大きなものから、小ピット状のものまで様々な形状があり、その数は386基におよぶ。土壌には集石のあるもの、火葬墓あるいは土葬墓と思われるもの等がある。土壌の平面形や内部の状態等によるグルーピングは、今後の課題とする。土壌内の遺物としては、古銭・鉄鎌・砥石・土錘・中世陶器・輸入磁器等があり、銭貨の多くは火葬墓から出土している。

また、15世紀から16世紀にかけての掘立柱建物址がみられるが、切り合い関係から最も新しい時期の遺構と考えられる。北に4棟、中央に6棟、南に1棟となっている。中央の6棟のうち4棟は規模が大きく並列することから、建て替えがあったのだろう。西側に井戸が2基あり、東側に石硯をもつ竪穴状遺構1基がある。これらの性格については、今後の課題である。

さらに中央西からは水田址(口絵)が検出された。トレンチ調査で、I A層下部から大畦らしき構造が確認され、藤原宏志氏(宮崎大)に調査を依頼したところ、I B層から高い比率のプラント・オパールが検出され、水田址があることが予想された。この結果をもとに調査を進め、大畦・小畦に囲まれた水田6面を露呈できた。西側は調査に至らなかったが、水田址が続いているものと思われる。一枚の水田面積は約70㎡と小さい。地層の堆積状況及び遺物との関係から、水田址の時期は16世紀初頭から中頃と推定される。

**北部** 15世紀後半から16世紀末にかけての墓域が形成されている。土壌123基、ピット138個があり、うち火葬墓が1基ある。土壌は平面形態から円形・方形・不整円形等に分かれ、さらに集石をもつものもたないものに分類される。掘った土をそのまま埋めもどすものが多い。出土遺物は副葬品として刀子・銭貨があるが、遺物をもつ遺構は数基と少ない。他に内耳土器・中世陶磁器があるが、いずれも破片で量が少なく埋土する際混入したものと思われる。土壌の多くは土葬によるものと推定されるが、骨を出土したのは5基のみである。

最後に調査の成果について整理してみよう。まず第一に県内では中世遺構の報告例はまだ数少ない中で、今回の調査は広範にわたり、多くの遺構を検出した点である。第二には中世以降に限り、墓域から居住域・生産域へと変化する様子が連続的にとらえられた点である。特に中世の水田址の検出は県内では類例がなく、当時の農業生産形態を知る上で貴重な資料となると思われる。今後の課題は、個々の遺構の性格づけ等の分析、地形環境の変化と遺構形成の関係、さらに文献史料からの検討等を通して、総合的に評価することであろう。(田川 幸生)

かみふたご  
(9) 上二子遺跡

所在地：松本市大字笹賀4,231-3 他

調査期間：昭和60年4月22日～同年6月5日，昭和60年8月26日～同年8月28日

調査面積：8,730㎡

立地：奈良井川左岸の自然堤防上

時代と時期：奈良時代末～平安時代初頭

遺跡の特徴：奈良時代末～平安時代初頭の小規模集落

主な検出遺構

時期	遺構	竪穴住居址	土 壙
奈良～平安初頭		1	1

主な出土遺物

土器・陶磁器：土師器・須恵器  
灰釉陶器・青磁

本遺跡は耕作土直下に砂礫層が厚く堆積している地域が大部分を占め、遺物もこの砂礫層中にごくまれに混入するのみである。当初遺構の存在が疑問視されたが、ごく限られた範囲に粘土質の土層が堆積しており、住居址・土壙ともにこの土層を基盤として構築されていた。

住居址は4.1m×3.9mの方形プランを呈し、西壁中央にカマドをもつが、柱穴、周溝等は確認されなかった(第25図)。カマドは壁を三角形にえぐり込んだタイプで両袖石と支脚石が残っていた。遺物は土師器片(長胴甕)が少量出土したのみであり、須恵器、灰釉陶器等は全くみられなかった。

出土遺物及びカマドの形態等から奈良時代末～平安時代初頭と考えられるが、近接する神戸遺跡、くまのかわ遺跡とは时期的に離れており、むしろ北方に位置する中二子遺跡、下神遺跡との関連が予想される。しかしながら住居址を1軒検出したのみであり、今後資料の増加を待って該期の集落の性格、他遺跡との関連等を追究していきたい。(田中正治郎)



第25図 上二子遺跡1号住居址全景

なかふたこ  
(10) 中二子遺跡

所在地：松本市大字神林字東原2,220—2

調査期間：昭和60年5月27日～同年10月8日

調査面積：約10,000㎡

立地：奈良井川左岸の自然堤防上

時代と時期：奈良時代，平安時代前期・中期，中世

遺跡の特徴：奈良時代～平安時代初頭の集落

主な検出遺構

時期	遺構	竪穴住居址	掘立柱建物址	溝	土塋
奈良～平安初頭		28	21	1	2
平安中期		1			4
中世					2

主な出土遺物

土器・陶器：土師器・須恵器・灰釉陶器

鉄製品：刀子

石製品：石帯(巡方)

青銅製品：銭貨

本遺跡周辺は表土直下に砂礫層が厚く堆積しており，遺物もほとんど表採されないので，遺跡は存在しない地域と考えられていた。ところが，中央道カルバート・ボックス建設工事に伴い住居址が発見されたことから遺跡の可能性が高まった。文化課・松本市教育委員会とともに，急遽，現地を踏査し南北約200mの範囲にのみ，砂礫の少ないやや安定した土層が広がっていることが確認され，発掘調査されることとなった(第27・28図)。

先行するトレンチ調査により，遺構面は表土下30～100cmに存在することが判明したため，この面まで重機による表土はぎを行なった。その結果，掘立柱建物址，竪穴住居址，土塋等が数多く検出されたものの，包含層内の遺物の多くが出土地点不明の表採遺物として取り上げねばならぬことになった。竪穴住居址は，掘立柱建物址群をとりかこむように分布しており，切り合いは少なく，短期間に存在した可能性が非常に高い。

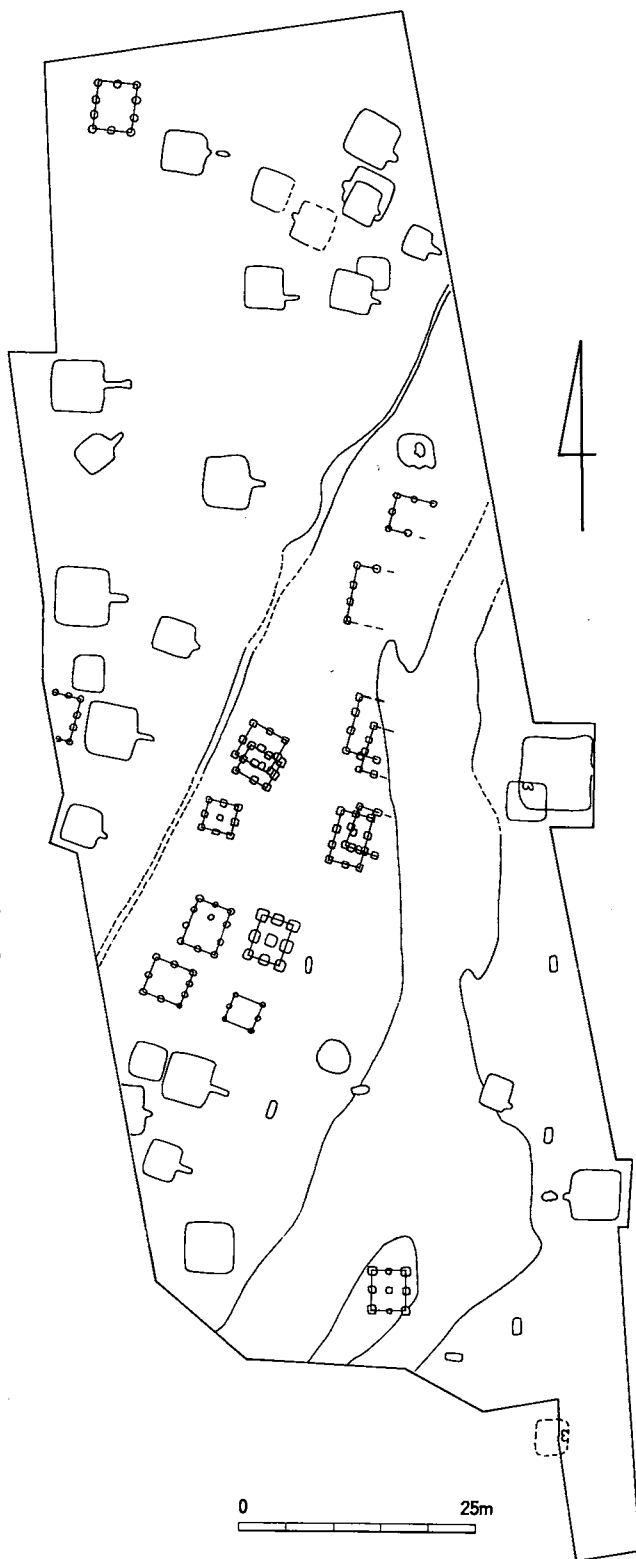
しかし，出土遺物，覆土の差異からは2～3時期に区分できそうである。掘立柱建物址は，竪穴住居址とともに存在したと考えられ，柱痕が明瞭に確認されるものが多く，明らかに建てかえられたと考えられるものもある。土塋は長方形のプランを呈するものがほとんどで，完形の土師器杯，



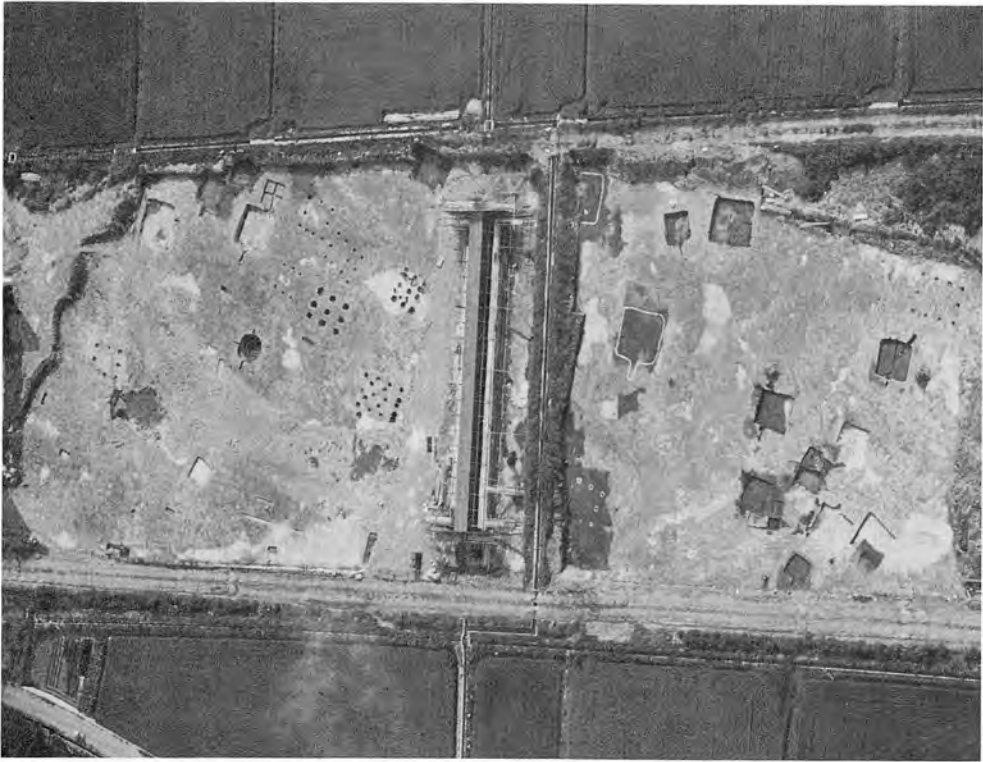
第26図 中二子遺跡15号住居址全景

灰釉陶器碗などを出土することから墓塚とも考えられる。石帯(巡方)を出土した例もあるが、時期的には竪穴住居址や掘立柱建物址よりもかなり新しいと考えられるものが多い。本遺跡中央を斜めに貫流する溝は、出土遺物から集落開始前、あるいは集落開始とほぼ同時に存在した可能性が高い。にもかかわらず、この溝に切り込む遺構が全く存在せず、また掘立柱建物址群はこの溝と方向を同じくしていると見られるものも多いため、集落発生、発展などの面で、今後の問題となろう。

竪穴住居址は多くが東側にカマドをもち、袖石をもたず煙道を長くのばすタイプである。最大規模をもつ15号住居址は8.0×8.0mの隅丸方形プランを呈し、東壁中央にカマドを有していた。壁は高さ60cm程度で部分的に2～3段のテラス状の構築が見られる。周溝が巡るが不明瞭なところがあった。柱穴・掘り方等はきちんと検出された。カマドは袖石をもたず煙道が長くのびるタイプと考えられるが、大半が用地外のため全体を明らかにすることはできなかった。遺物の出土は少なかったが、美濃産と思われるヘラキリの須恵器杯が出土しており、時期決定の目安となりそうである。なお覆土中より炭化材(板材?)が出土して



第27図 中二子遺跡全体図(1:800)



第28図 中二子遺跡全景

いる(第26図)。また12号住居址からは糸切りの須恵器杯がカマド火床から、ヘラキリの須恵器杯が床面から出土しており、編年上の好資料となろう。

掘立柱建物址群は出土遺物がほとんどなく、一部が後世の河川の氾濫によって破壊されているものの、建てかえ状況、方位等から小グループに分類可能である。今後竪穴住居址との併存関係、単位集団のとらえ等について考える際の好資料になるとと思われる(第29図)。



第29図 中二子遺跡1号掘立柱建物址

以上、本遺跡は掘立柱建物址群及び竪穴住居址を中心として、かなり短時間内に存在した集落として特徴づけられる。近接する大集落下神遺跡に先行して集落が開始されるのも注目される点である。今後、奈良井川左岸地域の古代開発の進展状況や、集落のあり方を考える上で重要な調査となった。

(田中正治郎)



(11) <sup>しもかん</sup>下神遺跡

所在地：松本市大字神林字大畑3,876他

調査期間：昭和60年4月22日～12月6日(次年度継続)

調査面積：25,425㎡

立地：鎖川扇状地末端，平安時代は奈良井川の自然堤防上と考えられる。

時代と時期：縄文時代中・後期，弥生時代波及期，奈良～平安時代

遺跡の特徴：平安時代前半期の集落

主な検出遺構

遺構 時期	竪穴 住居址	掘立柱 建物址	溝	柵列	土壇	ピット
弥生					1	
平安	87	30	82	5	75	約1,800

主な出土遺物

土器・陶器：土師器・黒色土器・須恵器・

灰釉陶器・緑釉陶器

鉄製品：刀子・鎌，土製品：紡錘車・羽口

石器：打製石斧・砥石

青銅製品：萬年通寶・神功開寶・鈔帯

本遺跡は松本市の西南部，奈良井川と鎖川の合流点の南に広がる，奈良井川によって形成された自然堤防上に位置し，ゆるやかに北東方向へ傾斜する。遺跡の範囲は，現在の下神の集落の辺りから，その東方へかなりの広がりをもっている。その東側部分を南北800mにわたって調査したが，3分の1は次年度へ繰り越しとなった。なお，昭和58年度に松本市教育委員会により，南田尻・熊坂・中道(検出後，埋土保存となった)・笹賀・町神の各地点の調査がなされている。調査区の北側部分で，熊坂・笹賀両地籍に接している(口絵，第30図)。

検出された遺構は，土壇1基(弥生時代への移行期にあたる粗い条痕文をもつ深鉢が出土している)を除き，全て奈良・平安時代に属し，調査区全体に広がっている。特にS40～N130の間が遺構の密度が高い。N200以北では遺構の分布もなく，土層も不安定な状態を示し，集落の北限と考えられる。南端部では旧流路が複雑に入り組んでおり，砂利層に切り込む遺構もあり，南限については不確定な要素がある。

竪穴住居址は87軒検出されている。1辺が3～4m程度の規模のものが多いが，1辺7～10mに達する大型の住居址もみられる。大型住居は他の竪穴と離れて存在する傾向がある。プランは方形を基本とするが，長方形もある。カマドを壁の中央にもつ例が圧倒的である。またカマドの主軸方向は東あるいは西を向くものが多く，北へ向くのは7軒のみであり，南に向くものは全くない。カマドの構造は壁外にとび出す掘り方をもつカマドともたないものがあり，後者にはしっかりした石組みを残す例がある。柱穴があるものは少なく，大半が無柱穴である。

掘立柱建物址は30棟検出されている。総柱建物址は6棟あり，他は側柱のものであり，廂のつくものが1棟ある。規模は総柱で2間×2間5棟，2間×3間1棟，側柱のものは，1間×1間3棟，1間×2間6棟，2間×2間2棟，2間×3間5棟，不明8棟となっている。南北

棟を示す例が多い。これら建物址は数棟のまとまりをもっている。例えばS200付近では総柱2棟、側柱3棟のまとまりがみられる。この他にもS380、S160、N100付近でも大きなまとまりとして捉えることができる。

この他にも、溝址や土壇、ピット等多数の遺構がみられる。S160～S30にかけて、2条の溝が平行して走り、その間に柵列をとまなう。またN90付近を東西に流れる流



第31図 下神遺跡西側道部分遺構出土状態

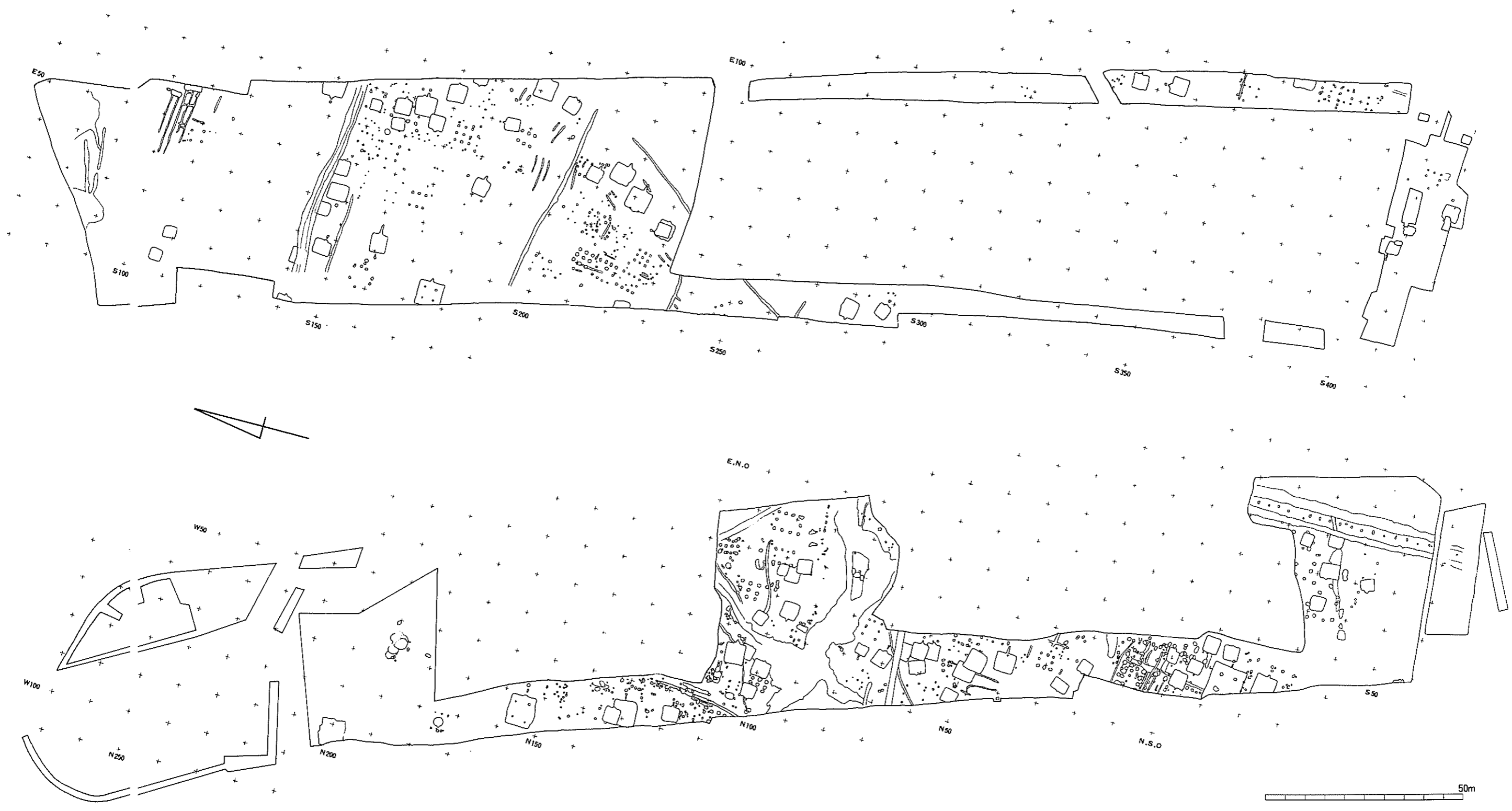
路(松本市調査熊坂(SKKK)溝1につながる)からは大量の土器と共に、「庖」の墨書(松本市調査でも住居址2軒から出土している)が集中して出土している。また万年通寶、神功開寶を出土したピットもみられる。

これらの遺構はいずれも10°前後の振れはみられるものの、いずれも南北、東西に主軸をとり、竪穴住居址、掘立柱建物址、柵列、溝等有機的相关をもち展開している。

時期については未整理のため大雑把な捉えとならざるを得ない。本遺跡で最古のものは、供膳形態における須恵器杯がヘラ切りされるものと糸切りが混在する段階で2棟確認されている。まず北側部分で集落形成がはじまるらしい。次の須恵器杯が糸切りされるものを中心とする段階になると、集落は拡大し遺跡全体で確認される。続いて土師器杯が内面黒色処理される段階になると住居址数も最高となる。この段階の後半では、黒笹14号窯式期～黒笹90号窯式期の灰釉陶器を伴うが、その住居址は非常に少ない。それ以降の住居址は確認されていない。従ってわずか100年余りの間に成立・展開した集落と考えることができる。

本遺跡は前述のごとく松本市教育委員会の調査時に住居址80軒、掘立柱建物址36棟が検出されており、大規模な集落の存在が予想されたが、本年度調査部分でもそれを裏付ける結果がえられ、さらに残る新年度調査区域を加えると相当な成果となることは間違いない。出土遺物にも皇朝十二銭をはじめとして、銚帯、墨書土器等注目すべき遺物が出土している。該期の土器研究に留まらず、松本平における平安時代前半期の集落の構造の一端を解明しうる遺跡といえ、今後の調査の成果がまたれる。

(石上 周蔵)



第30図 下神遺跡全体図 (上南部, 下北部) (1:1,000)

みなみくり  
(12) 南栗遺跡

所在地：松本市大字島立字宮原4,968他

調査期間：昭和60年7月1日～同年12月27日

調査面積：13,240㎡

立地：鎖川と奈良井川の合流点に近い奈良井川の自然堤防上

時代と時期：縄文時代中・後期，弥生時代後期，古墳時代，奈良時代，平安時代，中・近世

遺跡の特徴：古墳時代から平安時代の集落

主な検出遺構

主な出土遺物

遺構 時期	柵列		竪穴 住居址		溝		井戸		集石		土壇		墓塚		掘立柱 建物址	
	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II
大地区																
古墳時代			4													
奈良時代		3	4	5												1
平安(前)			1	43										2		2
平安(後)			15	47	19								3			
中・近世							1		3			1	3			
時期不明			1	16	5						34	約 300	2	32	5	20

土器・陶器：縄文土器・弥生土器・土師器・内黒土器・須恵器・灰釉陶器等

鉄製品：鎌・刀子・直刀・紡錘車等

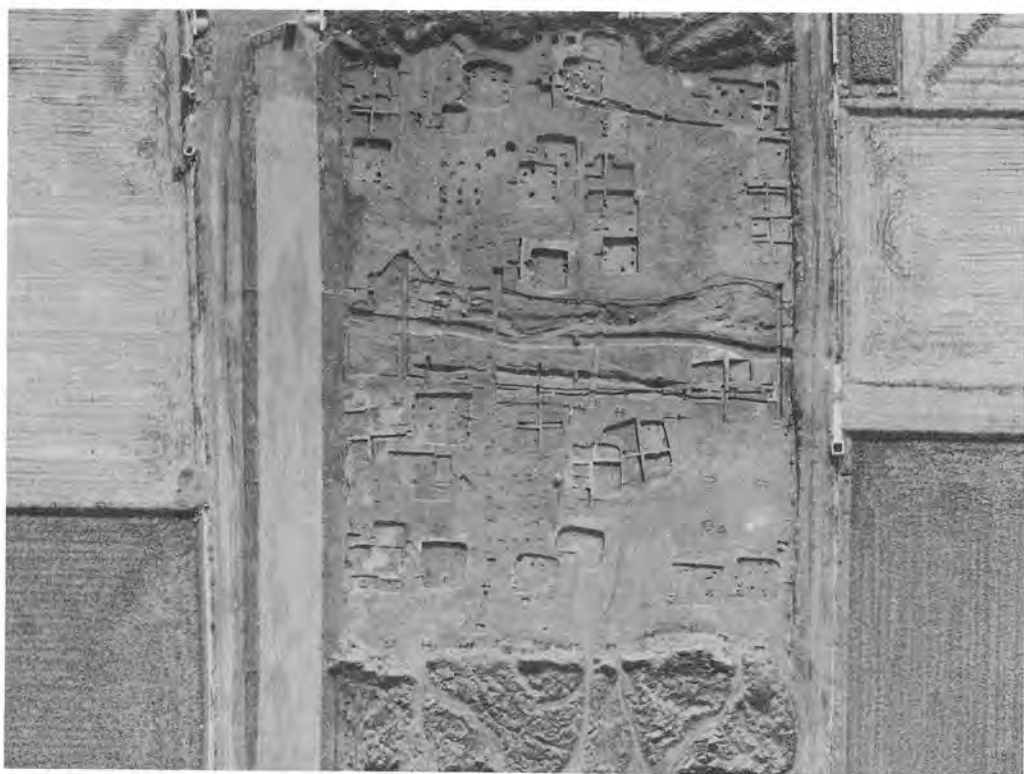
青銅製品：八稜鏡・金環・銀環・佐波理鏡・錢貨等

はじめに 奈良井川以西・鎖川以北に開ける沖積地には境なく遺跡群が展開し、従って南栗遺跡だけでも数10万㎡では囲い切れない広がりをもつ。約600mの細長い発掘域は、現在の微地形で2区分が可能なることから、便宜的に北からⅠ・Ⅱ区に分けて調査した。両地区とも標高はおおよそ600mあり、現地形で北へ向かうほど低くなっている。さらにⅠ区の北側に堀川をはさんで北栗遺跡が広がる。当初は新村島立条里の一部と認識していたため、事前調査としてプラント・オパール分析を行い、水田址の可能性が想定されたが、古代集落址としての意義に重点が置かれることになった。発掘区外においては以前松本市教育委員会が発掘調査を行っており、当該区域を囲むようにテストピットをあけて遺構・遺物の確認をしている。それによれば鎖川に近い南端では皆無であり、川より500mほど北へはいった付近から遺物が散布しているようである。今回の発掘によって確認された集落域の南端とおおよそ一致し、堀川に近いⅠ区近隣では遺構・遺物が確認されている。なお本年度は、2年次以上にわたる本格調査のうち初年度に当たる。以下時代別に概要をまとめてみたい(第32図)。

**縄文時代** Ⅰ区では後期掘之内式土器片が数点得られた。また焼土ブロックが集中する箇所があるが、生活域とは積極的に認め難い。Ⅱ区では中期曾利式土器片が出土し、同様に焼土ブロックのはいる箇所があった。

**弥生時代** Ⅱ区で1ヵ所から集中して後期箱清水式土器と庄内式併行期の土器片が2個体分ずつ出土した。

**古墳時代** Ⅰ区で竪穴住居址が確認されており、今年度の発掘域の中ではごく限定された



第32図 南栗遺跡全景

場所に営まれている。2軒の住居址の床下からそれぞれ銀環、管玉が出土した。Ⅱ区では和泉式土器が単独に、また墓とした土壌の中から金環が出土したが、伴う遺物はなく古墳時代の所産であるかは不明である。

**奈良時代** Ⅱ区でも漸く住居が営まれるようになり、前代より生活空間が広がる。両地区とも掘立柱建物址が確実に存在し、竪穴住居址の広がる空間に散在的にみられる。Ⅰ区では既に古墳時代に掘立柱建物址が構築されていたかもしれない。竪穴住居址については、ほとんどが東壁中央にカマドをもち、統一性が指摘される。また竪穴住居址の規模は大きめのものが見られ、平安時代前半へ受け継がれる。Ⅱ区の柵列は該期のものかもしれない。

**平安時代前半** Ⅰ区では竪穴住居址が1軒しか確認されず、生活域その他の実態をうかがい知ることはできない。Ⅱ区の生活空間は前代を踏襲するが、竪穴住居址は大幅に増え、切合いも著しい。カマドはおおむね東側にある。確実な掘立柱建物址の例は少ないが、おそらくすべて該期かそれ以前に属すると考えられ、前代同様散在している。また、墓址は点在し、特に墓域というものはないようである。

**平安時代後半** 生活空間はⅠ区では奈良時代までに集落が占地していた場所に竪穴住居



第33図 南栗遺跡24・25号住居址付近全景

址などは確認されず、その北側から堀川に至る100m強の間に限られる。Ⅱ区では平安時代前半と同じ空間に、ほぼ同数の竪穴住居が継続される。その切合いは前代同様著しいが、おおよそ2～3軒くらいの切合いに落ち着く。カマドの位置は多く東側となるが、変化ばらつきが見られ、1軒の面積は小規模化する。



第34図 南栗遺跡19・20号掘立柱建物址全景

また金属製品がこの頃になると住居址内からの出土を見る。この時期の掘立柱建物址はない。そのほか多数の東西方向の溝、少数の南北方向の溝が検出されているが、その多くはこの時期でも新しいものと考えられる(第35図)。墓址は前代同様散在し、集中する箇所はない。



第35図 南栗遺跡中央溝全景

**中・近世** 中世の遺構として消極的ながら考えられる土壌が3基検出された。割れ石を主に河原石を詰め込んだもので、うち1基から内耳土器片が出土した。3基とも近隣して存在し、炭化物が検出されているが、性格は不明である。また中世から近世にかけての墓址が捉えられた。Ⅱ区では3基が近くにまとまって確認でき、炭化物と焼土のほか骨や古銭が出土し、火葬されたものであろう。古銭は「永楽通寶」のみ判読できている。

Ⅰ区では同様の墓址が1基検出された。そのほか馬と思われる骨をもつ墓塚や井戸が確認されている。以上のように中世以降では、日常の居住空間としての占地は認められない。

**まとめと今後の課題** 今回の調査では古墳時代から平安時代におよぶ古代集落址であることが理解された。集落は古墳時代には限定された場所に始まり、Ⅰ区では平安時代にはいってそれ以前の居住区を捨て、別の空間を利用している。やがて平安時代が終わる頃、日常の生活域としては放棄され、以後その復活はない。集落の移動や土地利用の変化の問題がとらえられ、その要因を考えていかなければならない。逆に集落自体は継続して営まれていくのであり、隣接する遺跡など周囲の状況を含めてその意味を考えていくことも必要である。

(野村一寿・百瀬長秀)

きたくり  
(13) 北栗遺跡

所在地：松本市大字島立字鍵田4,274-1 他

調査期間：昭和60年9月9日～同年12月11日

調査面積：14,130㎡

立地：鎖川，梓川によって形成された扇状地扇端部

時代と時期：弥生時代後期，奈良時代，平安時代，中・近世

遺跡の特徴：弥生時代，奈良時代，平安時代，中・近世の集落

主な検出遺構

主な出土遺物

時期	遺構	竪穴住居址	掘立柱建物址	竪穴状遺構	溝	土壇	その他
弥生(後期)		1					
奈良		3	1				
平安(前半)		20	4	1	1	} 約100	
平安(後半)		7		1			
中世以降				11	7	約20	土壇墓6
時期不明		8	3		3	約20	

土器・陶磁器：弥生土器・土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・中近世陶磁器  
 石器：石鏃・打製石斧・砥石  
 鉄製品：刀子・釘 木製品：数珠  
 青銅製品：和鏡・錢貨・簪  
 土製品：瓦塔・羽口・土錘  
 その他：馬の歯・炭化種子(麦)

本遺跡は，北半分が島立条里遺跡のなかに含まれ，南半分も条里関係遺跡としてとらえられてきた。近年，松本市教育委員会によって，現条里景観内の調査が進められ，徐々にその内容が判明しつつある。しかし，隣接する南栗・三の宮両遺跡との関係をはじめ，遺跡の範囲や性格等明確にされていない部分が多い。

本年度の調査は，遺跡内のカルバートボックス建設部分4地点に限って行われ，全調査対象面積の約 $\frac{1}{4}$ が調査された。南北に850mと遺跡の範囲が広いので，大きく3地区に分けて調査を進めた。北側のⅠ区ではほぼ中央に位置するカルバート・ボックス部を，中央部のⅡ区では2か所を，南側のⅢ区では最南端の部分，それぞれ部分的ながら調査している(第36図)。

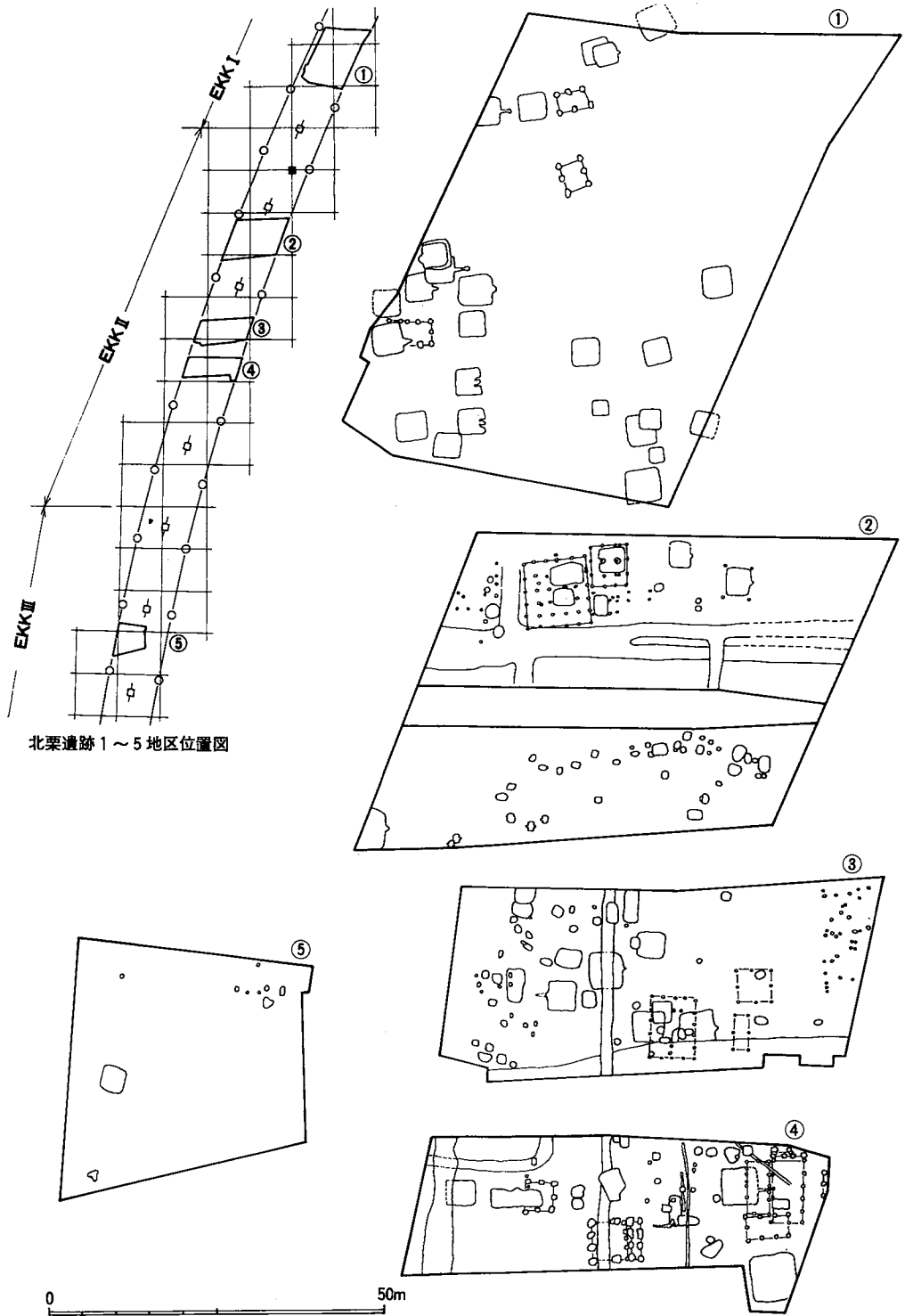
土層の堆積状況は，ほぼ遺跡の中央を境にして大きく変化する。それは南側が奈良井川・鎖川の堆積域であるのに対し，北側が梓川堆積域であることに起因している。しかし，全域にわたる土層観察ができていないので，詳細な内容は来年度調査をまたねばならない。

以下各区の概要を時代別に報告したい。

**奈良時代以前** Ⅲ区の堀川左岸で弥生時代後期の住居址1軒が検出された。遺構に伴わない遺物としては，Ⅱ区で弥生後期土器，打製石斧，石鏃が出土した。

**奈良時代** Ⅰ区では調査区西側で数軒の住居址が検出された。主軸方向を東西に合わせ，東壁カマドで長い煙道を構築する等の共通点をもつ。Ⅱ区では調査区の南端で比較的規模の大きな掘立柱建物址が検出された。





**平安時代前半** I区では竪穴住居址が前代の住居址とほぼ同一の場所に構築され、住居址数が増加する。前代と同様に主軸方向が東西を向き、南北の同一線上に4軒の住居址が並ぶ例もある。II区でも竪穴住居址の主軸方向は東西にそろい、カマド位置もほとんどが東壁である。

遺構の切り合いがないこと、出土土器が該期の中でも古い段階に比定されるものが多いことから、ある程度限られた時間幅の中で集落が構成された可能性がある。なお、須恵質の瓦塔破片が出土しているが、本期に属す可能性が高い。この他、Ⅰ・Ⅱ区とも掘立柱建物址のいくつかは、検出面及び覆土から奈良～平安時代前半の間の構築と思われる。



第37図 北栗遺跡(Ⅱ)14号住居址全景

**平安時代後半** 全体が調査されていないため不確実ではあるが、Ⅰ区では前半期の集落の東側に場所を移して竪穴住居址が構築されている傾向がうかがえる。住居址の主軸は東西方向よりずれるものが多い。Ⅱ区では確実に該期と認められる住居址がほとんどなくなり、出土遺物全体の中でも灰種陶器はきわめて少い。この他に竪穴状遺構・掘立柱建物址・溝等が本期に属すと思われるが、積極的な根拠がやや乏しい。

**中世以降** Ⅰ区ではごく少数の遺構が検出されたのみである。Ⅱ区では調査区のほぼ全面から各種の遺構が検出された。遺構覆土の状況から、本期を前半期と後半期に分離することが可能である。前半期には竪穴状遺構・土塼がある。竪穴状遺構のひとつからは鎌倉初期の松鶴鏡1面(口絵)、器種不明鉄製品、馬の歯が出土し特筆される。土塼群中には火葬墓(口絵)が含まれ、底面には礫を敷くもの、木材を置くもの等バラエティーに富む。また、数珠玉・炭化麦を出土した例もあり、墓域的な性格が見出せる。後半期には掘立柱建物址、溝がある。比較的規模の大きな掘立柱建物址には、柱列の範囲内に竪穴状遺構(口絵)を付属する例がある。溝はほとんどが東西・南北に走行している。

**まとめと今後の課題** 本遺跡は現条里景観に関係する遺跡と考えられてきた。しかし、明確に条里と結びつく遺構は今のところ確認されていない。本年度調査範囲内においては、弥生時代後期から中世までの集落の存在が明らかになった。特に、奈良時代から平安時代にかけては、複数の集落が点在している可能性が高まった。来年度調査においては、これらの集落のあり方をより明確にし、北栗遺跡の集落の変遷過程を明らかにしていく必要がある。また、現条里景観の起源を含め、島立地区の開発の歴史も把握されねばならないであろう。さらに、弥生時代以前の時期の遺構の存否や、文献で近隣に存在が予想される極楽寺跡等の追究も、重要な調査課題として考えたい。

(大竹憲昭, 百瀬新治, 綿田弘実)

(14) <sup>さん みや</sup>三の宮遺跡

所在地：松本市大字島立字大麦田3,110一口他

調査期間：昭和60年8月26日～同年12月13日

調査面積：26,800㎡

立地：扇状地扇端部

時代と時期：古墳時代，奈良・平安時代，中・近世

遺跡の特徴：古墳時代末～平安時代にかけての集落，中世の生産域

主な検出遺構

主な出土遺物

遺構 時期	竪穴 住居址	掘立柱 建物址	溝	土壇	ピット	その他
古墳	5	28	}	277		
奈良	6					
平安(前)	10					
平安(後)	19					
中世		2		323		集石址1 水田址1 畑址1
近世				1		
時期不明			14			集石址1

土器・陶器：土師器・黒色土器

・灰釉陶器・須恵

器・常滑甕 他

土製品：紡錘車・羽口

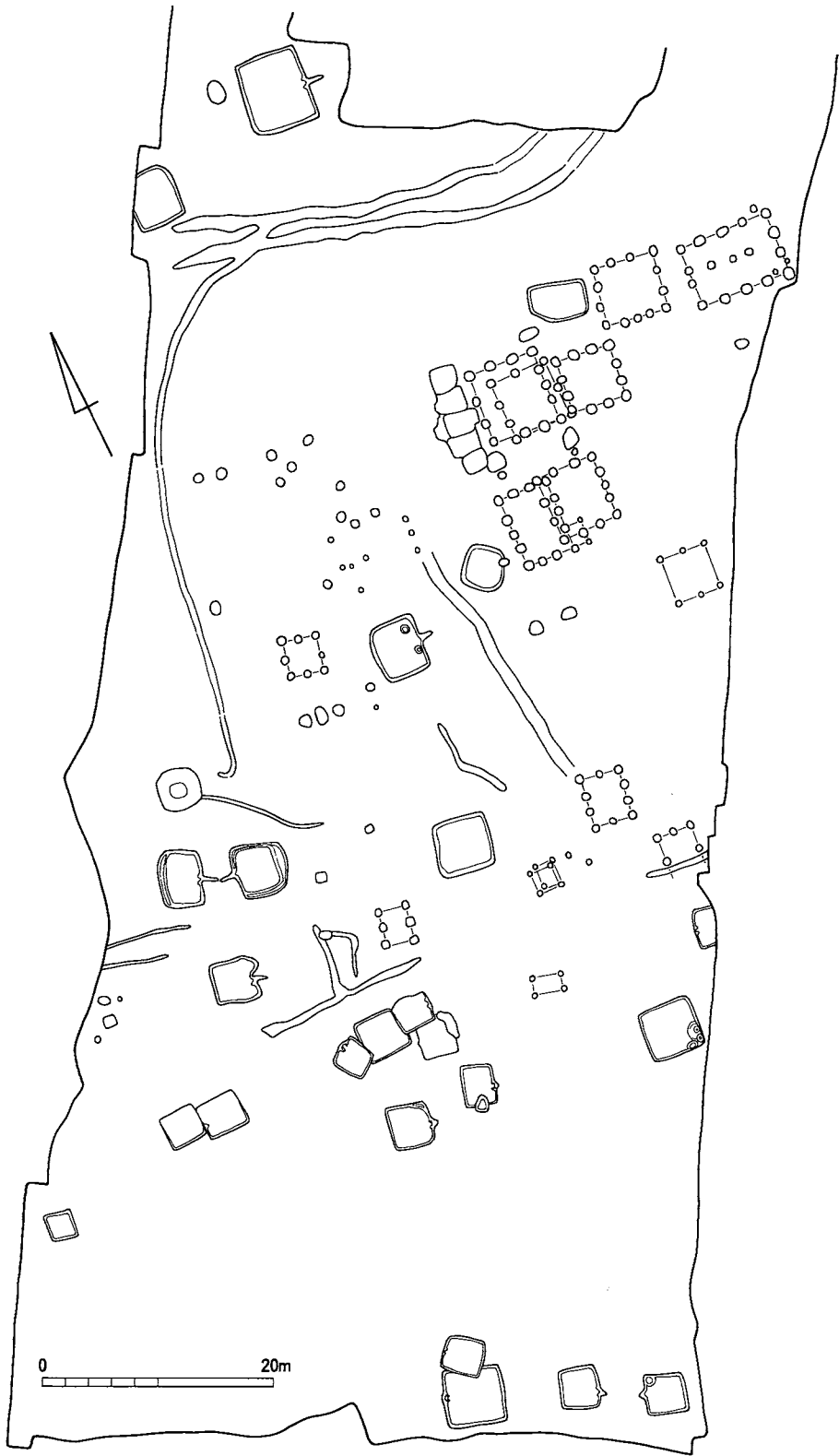
鉄製品：鉄斧・鎌・刀子等

青銅製品：銭貨

本遺跡は北アルプス山塊に源を發し、松本平をやや北に流路を向けながら東流する梓川の右岸に位置し、梓川と奈良井川とによって形成された複合扇状地上の扇端部に立地している。中央道長野線建設に伴い設定された調査区は、分布調査・文献等から知られていた同遺跡範囲の西端部分を含むとともに、従来、島立条里遺跡として条里的遺構の存在が考えられてきた地区の北端部にかかっている。このような歴史的環境に基づき、当遺構の調査は、条里遺構の存否およびその性格づけをも含めた水田址の確認と、三の宮遺跡の範囲・時代性に対する再検討を行うことに主眼を置いて実施された。また、本調査に先立ち、条里的遺構に対処する意味からプラント・オバールの定量分析を二度にわたり実施し、藤原宏志氏(宮崎大)に依頼し埋没水田址に関する層位的知見を得ている。

今年度の調査は、工程上カルバート・ボックス部分と東西両側道部分に限定されたものとなったが、調査区南半部を中心に比較的まとまった数量の遺構・遺物を検出することができた。今回検出された遺構群は、性格的に多岐にわたるとともに、時間的にも古墳時代から中・近世までと長期にわたるが、現在のところおおむね、古墳時代末、奈良時代、平安時代前半、同後半、中世の5期に大別して考えられよう。以下、各期の概要について述べる(第38図)。

**古墳時代** 住居址5軒程が確認されている。調査区南半部に限られ、調査軒数も少ないことから、集落全体の構造については把握しえないが、数軒を単位とした散在的分布の状況が窺われる。



第38図 三の宮遺跡南端部遺構全体図(1:600)

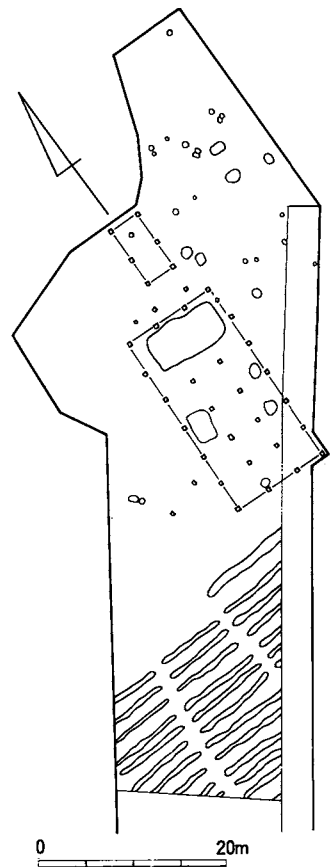
**奈良時代** 前代のこうした分布性向は、続く該期の住居址のあり方についても当てはまる。ただし、そうした住居址群とともに、大形の掘立柱建物址群が構築されはじめるようであり、当時の時代性ならびにその社会的背景が注目される。

**平安時代** この時代になると住居址数は倍増する。分布的にも、前代までは観られなかった河川の氾濫に起因する微高地上への進出も顕著に認められ、居住空間の移動と面的拡張が図られたことが理解される。自然的・社会的要因によってもたらされたであろうこのような居住域の変化は、取りも直さず、生産域の面的・質的な変化を伴うものであったと考えられる。その古代条里制の問題にも深く係わる当該期の生産域については、先述したプラント・オパール分析によっても平面的に推測されてはいたものの、今年度の調査によつては一部を除き詳細な観察を行うことはできなかった。現段階における調査時の所見を総合するならば、微高地上に占地する居住域に隣接した低位部＝前代までの居住域に、水田を中心とする生産の場を設定することも可能と思われるが、結論は61年度調査の成果に委ねたい。

**中世** 中世の遺構群は、調査区中央部に集中して検出されているが、前代までとは数世紀にわたる断絶があるようである。該期の遺構として特記されるのは、掘立柱建物址(群)とそれに隣接して検出された畑址の存在であり、ともに北方位を意識したあり方を示している(第39図)。また、畑址の南方からは、これらと同一層位面上に現畦畔区画とほぼ一致する条里遺構的な水田址が確認されており、前二者との関係をも含めて、本線部分の調査による有機的な評価がまたれている。

**まとめと今後の課題** 本年度調査の概要を述べてきたが、そこで明らかなように、東西両側道部分に限定された調査という限界もあり、当初の課題に対して十分な解答を与えるものとはなりえていない点は否めない。古代の集落構造や生産構造、条里制をも含めた中世の諸問題など残された多くの課題については、本線部分を中心とした61年度調査ならびに北栗遺跡等隣接諸遺跡との対照・検討を通して明らかにしていきたい。

(百瀬 忠幸)



第39図 三の宮遺跡の掘立柱建物址と隣接する畑址(1:800)

<sup>なかばら</sup>  
(15) 中原遺跡

本遺跡は塩尻市片丘南熊井に所在する。洪積扇状地に波田ローンをのせた台地の中央部に立地し、北東部に浅い谷を刻んで大沢川が北流する。標高は720mから750mで、北西に緩く傾斜する畑地である。東は山の神遺跡、北は犬原遺跡と境を接する。

調査は遺跡の東側部分約21,500㎡を対象に、昭和60年8月6日～同年8月28日及び、10月21日～10月24日にかけて行った。まず層序、遺物の出土状況、遺構の有無等を探るため、傾斜方向及びそれに直交する方向に23本、延1,960mのトレンチを入れた。その結果、基本的層序はⅠ層耕作土、Ⅱ層暗褐色土、Ⅲ層ロームであり、縄文時代中・後期の土器片や黒曜石片を含むⅡ層は調査区南西部のごくせまい範囲にその分布が限られることが明らかになった。また出土した土器片はいずれも小破片で量も少なく、遺構に結びつく可能性はないと判断された。さらにⅠ層下Ⅱ層上面に検出された3本の溝状遺構は、その埋土の状況等から第二次大戦後にこの地が開墾された以後のものと考えられた。その上、3ヵ所でⅢ層ロームを掘りしてみたものの先土器時代遺物の出土は見られなかったことから、本調査には至らなかった。総調査面積は、2,980㎡である。

(西牧 尚人)

<sup>せんぼんばら</sup>  
(16) 千本原遺跡

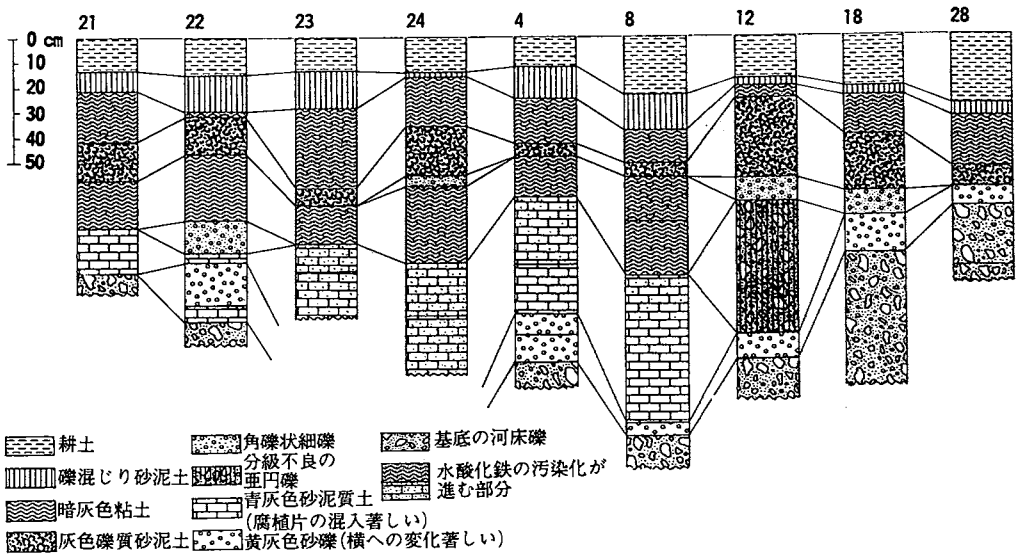
本遺跡は塩尻市広丘高出千本原に所在する。高ボッチ山の西山麓端、大沢川が田川と合流する地点に近く、西及び北に向ってわずかに傾斜する扇状地端で、周辺は宅地あるいは畑地である。中央自動車道の建設用地にかかる遺跡の面積はおよそ7,000㎡である。本遺跡は今までに調査されたこともなく、踏査によっても遺物はまったく採集されなかった。

遺跡の層序の確認、遺物の出土状況、遺構の有無を探るために、遺跡の東側に南北方向に60mと30mのトレンチを入れた。その結果、砂利まじりの耕作土の下に厚さ40～50cm程に2次堆積のローム層があり、その下には何層にも砂利層が堆積しておりその深さは表土から4mに達している。その堆積の状況から見て短い期間に一気に堆積したものと思われる。砂利層の下には黒色粘土層、角礫を含んだ灰色の粘土層、灰色粘土層、さらに植物の葉や根などがおしつぶされた状態で入っている黒色土へとつづいている。

遺物はまったく検出されず、人間の生活の跡を確認することはできなかった。(丸山徹一郎)

<sup>たかだ</sup>  
(17) 高田遺跡

本遺跡は塩尻市広丘野村に所在する。この地域一帯は、田川の旧河道に当たる低湿地である。東方片丘丘陵から幾筋かの沢が西流して、段丘崖下に小扇状地を形成しており、小田川を流れ、田川の氾濫原の支配に置かれる。



第40図 高田遺跡柱状断面図No 4

調査は昭和60年8月下旬から9月上旬にかけて、4,700㎡を対象に遺跡の性格を把握するため、地形形成過程、層序、遺物包含層の有無などを明らかにすることを目的とし、地形に沿って幅1.5mのトレンチ8本を設定して、河床礫層まで掘り抜き調査した。

層序は、凹凸した河床礫層の直上に、多量に腐植片を混ぜ、また高師小僧も見られる沼沢性堆積物の青灰色砂泥質土が厚く堆積している。その間には、沢からの押し出し、または田川の氾濫による砂礫が挟在している。上面は砂礫土が覆い、それが耕土化されている。下位の砂泥質土は不透水層となるため排水が悪く、地表下50cm前後の深さに暗きよが網状に幾筋か抜かれており、低湿耕作地として難渋していたことがうかがえる。

遺物は、最下位の青灰色砂泥質土から、須恵器甕片が5点と、上位の砂礫土から磨耗した黒曜石塊が1点出土しているが、土層状況から偶発的に取り込まれたもので、包含層とは言い難い。したがって、生活舞台の立地としては不適と判断され、本調査には至らなかった。なお、河床礫層直上の青灰色砂泥土に混入する腐植片のC<sup>14</sup>の測定値は1480±80B. P.であることが確認された。  
(関 全寿)

みみなか  
(18) 南中遺跡

本遺跡は松本市島内南中に所在する。東方には奈良井川が北流し、西方には梓川が北東に流れ、それらにはさまれた梓川によるはん濫原の上に立地する。遺跡の範囲は梓川の古い自然堤防状の堆積の南東側にあたり、南東端は梓川の支流に開析されている。標高は580m～590mほどで、現在、国道147号線および国鉄大糸線沿いは宅地になっているものの、ほとんどが水田化されている。また、遺跡の南は高さ2mほどの段丘崖となり、その下の面には水田地帯が広がっている。なお調査期間は昭和60年11月8日～11月15日までであった。

昭和59年、松本市教育委員会により本年度調査区の南西部が調査されており、その際、溝9条、土壌状の落込み2基が確認されているが、その他の遺構はみられなかった。そのため、本年度調査においては遺構の有無および土層の状況を確認する目的で、中央道の路線方向およびそれに直交する方向に11本、延べ520mのトレンチを入れた。表土より少しずつ下げ、基盤とみられる砂礫層まで掘り抜いたが、遺構は検出されず、遺物も土師器2点、青磁1点が出土したのみでそれも小破片であった。しかもそれらはローリングを受けており、遺構との関連は薄いと思われる。このように本年度調査区においては遺跡と認定できるような結果は得られなかったが、先の松本市教委の調査、また西方に広がる集落等との関連から、南中遺跡は本調査区より西方に広がっているものと考えられる。

(中野 亮一)

わできど  
(19) 上手木戸遺跡

本遺跡は南安曇郡豊科町高家・南穂高に所在する。犀川左岸の低位沖積地、中央自動車道長野線の豊科インターチェンジ周辺が遺跡である。中央自動車道の建設用地にかかる遺跡の面積は35,400㎡である。遺跡の詳細が不明であるので昭和61年3月12日から27日にかけて遺跡の広がり、性格をつかむための確認調査を実施した。確認調査は、巾1.5mのトレンチを遺跡全域に全長800mにわたって配置して行なった。

確認調査の結果、A地点では現在の水田耕作土の直下は礫層であった。B地点でも現在の水田耕作土の直下は礫層となるが、部分的に現在の水田の下に川の氾濫によって土砂が堆積した水田面が検出されている。また、小規模な湿地であったところも確認された。C地点では礫層上面の砂層の堆積がA・B地点に較べて厚く、ところによっては1.5mにも達しており、この砂層に焼土をともなう落ち込みと溝状の遺構が検出されたが、時期を決定する遺物は出土しなかった。

A・B両地点についてはこれ以上の調査は必要ないが、C地点およそ2,000㎡については、次年度も継続して発掘調査を行なう必要がある。

(原 明芳)



## Ⅱ 普及・研究活動概要

### 1. 現地説明会

**上木戸遺跡**：昭和60年8月12日，午前中現地説明会を行う。現地プレハブに出土品を展示し，資料も作成配布して実施する。見学者250名。

**下神遺跡**：昭和60年9月8日，午前中現地説明会を行う。現地プレハブに出土品を展示し，資料も作成配布して実施する。見学者350名。

**南栗遺跡**：昭和60年12月1日，午前中現地説明会を行う。現地プレハブに出土品を展示し，資料も作成配布して実施する。見学者70名。

**北栗・三の宮遺跡**：昭和60年12月7日，午後松本市教育委員会と共催で現地説明会を行う。出土品を展示し資料を配布して実施する。見学者60名。

**吉田川西遺跡**：昭和60年12月15日，午前中現地説明会を行う。地元住民の関心高く参加者250名。現地プレハブに出土品を展示し，資料を配布して実施する。

### 2. 展示会

**中央自動車道長野線建設用地内遺跡出土品展示会**：松本・塩尻両市教育委員会の共催をえて次の2会場で実施した。展示品は，渦巻把手付台付鉢形土器(塩尻市上木戸遺跡出土)・瑞雲双鸞八花鏡(岡谷市大久保B遺跡出土)・緑釉陶器7点一括品(塩尻市吉田川西遺跡出土)・須恵器大甕(松本市下神遺跡出土)等約350点。多数の参観者があり好評であった。

松本市会場 あがたの森文化会館 昭和61年2月8・9日 見学者800名

塩尻市会場 塩尻市総合文化センター 昭和61年2月22・23日 見学者1,210名

**塩尻市南熊井地区展示会**：昭和61年1月19日，南熊井区公民館の要請により，地区内関係遺跡出土品展示会及びスライド会を関係班で実施，見学者区民250名。

**信濃美術館所蔵特別展示**：昭和61年2月27日～同年3月16日，信濃美術館所蔵展の特別展示に中央自動車道長野線埋蔵文化財調査出土品として，次の遺物を出品展示し広く県民多数の鑑賞に供した。緑釉陶器7点一括品・筆穂先(塩尻市吉田川西遺跡出土)・硬玉製垂飾(塩尻市上木戸遺跡出土)・瑞雲双鸞八花鏡(岡谷市大久保B遺跡出土)・和鏡(塩尻市吉田向井遺跡出土)計6点。

### 3. 研究会・学習会

研究活動の一環として，発掘調査全般や出土遺物について種々指導・助言をいただいたり，講師として招へいし研究会・学習会等を以下のように実施した。このうちの二・三については概要を記し，また「年報1」に未収録分も末尾に付した。(●印は講演も含む)

中島 豊志 松本第一高校教諭 自然遺物(4・5・9月及び年間)

梅村 弘 県農事試験場飯山試験地長 水田土壌(5・9～10)

- ∴ 藤原 宏志 宮崎大学助教授 } プラント・オパール分析(5月～10月 5回)
- 佐々木 章 大分短期大講師 }
- 戸沢 充則 明治大学教授 } 長野県遺跡調査指導委員会
- 永峰 光一 国学院栃木短大教授 } 発掘調査全般(5・28～29, 12・20～21)
- 田中 琢 奈文研センター長 }
- 林 茂樹 県埋文センター理事 }
- 森嶋 稔 上山田小学校教諭 }
- 橋崎 彰一 名古屋大学教授 古代・中世の土器(6・9～10)
- 井原今朝男 屋代南高教諭 条里遺構(6・12)
- 西沢 寿晃 信州大学医学部 人骨・獣骨等(6・17)
- 桐原 健 県史刊行会 弥生～平安時代土器(8・2～3)
- 神村 透 福島中学校教諭 弥生土器(8・9～10)
- 笹沢 浩 県史刊行会 発掘調査全般と弥生～平安土器(8月～2月 3回)
- 小穴 芳実 信濃史学会理事 } 条里遺構(9・17)
- 小穴 喜一 〃 }
- 武藤 雄六 井戸尻考古館 吉田向井・上木戸遺跡出土縄文土器(10・7)
- 坪井 清足 奈文研所長 } 吉田川西遺跡(10・11 戸沢充則・笹沢浩氏同行)
- 宮坂 光昭 諏訪考古学研究所 }
- 川上 元 上田市教委 }
- ∴ 吉田 恵二 国学院大学助教授 古代～中世土器(11・19～21)
- ∴ 藤沢 良祐 瀬戸市歴史民俗資料館 } 中・近世土器(2・17～19)
- ∴ 仲野 泰裕 愛知県陶磁資料館 }
- ∴ 小笠原好彦 滋賀大学教授 古代集落(2・24～27)

なお、このほか次の方々からも有益な指導・助言をいただいた。(順不同・敬称略)

神沢昌二郎・直井雅尚・高桑俊雄・関沢総(以上松本市教委), 小林康男・鳥羽嘉彦(以上塩尻市教委), 島田哲男(大町市教委), 設楽博己(筑波大), 泉拓良(奈良大), 鈴木忠司(平安博物館), 石野博信(榎原考古学研究所), 丹羽博(愛知県埋文センター), 木下平八郎(長野県考古学会), 百瀬正恒・吉村正親(京都市埋文研究所), 栗島義明(埼玉県埋文事業団), 辻本崇夫(明治大学考古学陳列館)。

**中・近世陶磁器学習会**：昭和61年2月17日～19日，塩尻市総合文化センターにて。講師は藤沢良祐(瀬戸市歴史民俗資料館)・仲野泰裕(愛知県陶磁資料館)両氏。以下簡単に説明したい。

本年度は，塩尻・松本地区ともに沖積地の遺跡を対象とした調査が多くなり，いくつかの中・近世の遺跡を調査した。その結果，他地域から搬入された国産陶磁器が多数発見された。かつ，それらは遺構の時期などを決めるのに重要な手がかりとなるもので，それらをどう見るかが重要な課題となり，学習会を行うこととなった。瀬戸・美濃系陶器の出土量が多いことから，講師としては，東海地方の生産地で研究している藤沢良祐・仲野泰裕両氏をおねがいがした。なおこの学習会の準備や当日の進行は，吉田川西・神戸両遺跡調査班

が担当した。

17日午後より、藤沢・仲野両氏に吉田川西・神戸・北粟・三の宮各遺跡の出土遺物を実見しながら細部にわたる土器の観点や年代観などについて教示いただく。18日は両氏より昨日の遺物実見からえた意見・感想などを発表してもらい、それについて調査研究員が各方面から質問した。最後に両氏に「中・近世陶磁器の研究の現状と課題」というテーマで講演をおねがいをした。藤沢氏は近年の生産地の調査の成果に基づき、窖窯末期より大窯期にかけての編年や、研究の現状と問題点につき、特に大窯段階の編年が、近年の窯址の調査によって大きく変更される可能性があるとして述べられた。消費地においては陶器のもつ年代観が重要な意味をもつため、今後の研究動向を注目していかなければならないことがわかった。仲野氏は、近世陶磁器の器種分類や生活用具の中における陶磁器の占める位置、更に流通の問題についてもふれられた。ここで両氏ともに、生産地(窯址)における陶磁器の研究では限界があり、生活用具の中の陶磁器を研究するには、消費地でこそ行われる必要があることを強調されたが、今後私達にとっても遺物を分析していく中で大きな課題として残るであろう。

今回の学習会を行うにあたって、両遺跡ともに調査が終了してから時間が短かったため遺物の整理がほとんど進んでおらず、出土したすべての遺物を観察できていなかった。まして消費地としての遺物の捉えは、ほとんどできていなかった点は反省しなければならない。しかし、今回の学習会を行う中で得られた成果、陶磁器の見方、年代観、研究方法などは、今までほとんど目が向けられていなかった中・近世の陶磁器の研究をしていく上で重要な意味をもつものと思われる。また、この成果は、今後の整理や調査のなかで生かしていく必要がある。

**松本平の古代集落を考える学習会：昭和61年2月25日、塩尻市桔梗会館、講師は小笠原好彦(滋賀大学)氏。以下簡単にまとめておきたい。**

現在当センターが調査を継続している中央道長野線は、松本平を南北に縦断する大トレンチとして、本年度調査分だけでも古墳時代から近世に至る膨大な資料を提示している。中でも奈良井川左岸の沖積地帯では、沖積扇状地上の地形環境の似かよった遺跡群を貫くこととなり、古墳時代末から奈良・平安時代にかけての古代集落のあり方を考える上で格好なフィールドとなった。一方本年度の調査は、各々が担当する個別の遺跡・個別の遺構というレベルでの視点に留まり、集落として、さらに大きく奈良井川左岸に展開する古代集落の構造の解明といった統一的な視点をもてなかった。そこで、来年度の調査に向け古代集落の構造分析のための方法を学習し、統一的な視点で調査にのぞむべく本学習会が設定された。

学習会は、単位集団のとらえ、集落と生産域の関係の二点を学習の柱に、奈良井川左岸の各遺跡の調査概要の発表(本年報28P～47P参照)、その上にたった問題点の提示、小笠原氏の指導という順で進められた。単位集団のとらえについては、土器による時期区分の検討と同時性の把握を前提として、遺構の方向性、竪穴住居址・掘立柱建物址等の構造、建物群

の配置、埋土による分類等から単位集団が析出されるべきことが指導された。特に、竪穴住居址群と掘立柱建物址群の関係をとらえること、さらに、析出された単位集団同志の関係を理解するため同一の墨書を共有する集団等に注意することなどが指摘された。

次に、生産域と居住域に関しては、調査が条里景観を残す島立地区の北栗・三の宮遺跡にかかっている点から、本年度の成果をふまえた調査によって現条里(景観)の施行された時期をさらに限定するとともに、それに先行する水田・畑址等の精査を意図し開発の過程が解明されること。そのためには、坪境と推定される水路・道路・畦畔等の断面・下面の調査を徹底して行うこと。また、坪境を含め集落の並びや溝などの関係を把握し、集落がどのくらいの規模でどのくらいの距離をおいて展開していたか、集落と集落の間はどうなっていたのか、特に遺構の存在しない部分の解釈ができるような調査方法がとられなければならないとの指導があった。

最後に、小笠原氏から古代集落研究の学史をふまえた総括的な指導をいただき閉会した。今回の学習会から、古代集落における単位集団の析出とその構造化、労働編成と土地所有に迫る宅地と生産域のとらえの二つが調査への課題として位置づけられたわけで、本年度までの調査を見返し、さらに来年度以降の調査に向けて、その方法的な統一と学習が深められなければならない。

以下は年報1に未収録の昭和59年度関係分です。

**灰釉陶器学習会**：昭和60年2月26日～27日、塩尻市吉田川西遺跡出土品を中心に、講師田口昭二氏(多治見市教育委員会)を招へいして実施。

**押型文土器学習会**：昭和60年3月6日～7日、塩尻市八窪遺跡出土品を中心に、神村透氏(木曾福島中)を講師として実施。

**縄文時代前期末から中期初頭の土器群の様相についての研究会**：昭和60年3月22～24日、岡谷市大洞遺跡出土品を中心に、泉拓良氏(奈良大)・今村啓爾氏(東京大)・小島俊彰氏(金沢美術工芸大)を講師として実施。

#### 4 刊行物

「長野県埋蔵文化財ニュース」(年4回) No13～16

「長野県埋蔵文化財センター年報 2」1985

### Ⅲ 機構・事業概要

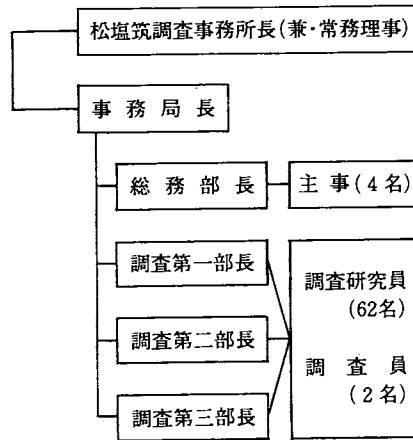
#### 1. 機構

##### (1) 組織

###### ○理事会

理事長（県教育長） 副理事長 常務理事 理事（県企画局長） ◇（県高速道局長） ◇（県教委文化課長） ◇（県考古学会長） ◇（市町村長会代表） ◇（市町村教育長代表） ◇（考古学研究者代表） （10名）
監事（県会計局会計課長） ◇（県教委総務課長） （2名）

###### ○事務局



##### (2) 事務所

本 部 長野市大字南長野字幅下692の2長野県教育委員会 文化課内  
 松塩筑調査事務所 塩尻市大字広丘高出字西原1977

#### 2. 事業

##### (1) 理事会及び会計監査

###### 理事会

第6回理事会 昭和60年3月22日 会場 長野市長野国際会館

第1号議案 昭和60年度事業計画書(案)について

第2号議案 昭和60年度収支予算書(案)について

第3号議案 昭和59年度収支補正予算書(案)について

第7回理事会 昭和60年5月31日 会場 塩尻市ホテル中村屋

第1号議案 昭和59年度事業報告書について

第2号議案 昭和59年度決算報告書について

第3号議案 昭和60年度事業計画書の変更について

第8回理事会 昭和60年9月6日 会場 長野市長野国際会館

第1号議案 昭和60年度事業計画の変更について

第2号議案 昭和60年度収支予算の補正について

## 会計監査

昭和60年5月21日実施 昭和59年度事業計画書及び収支予算書について

## (2) 職員研修

奈良国立文化財研究所研修関係(年間) 9回 9名

(一般研修, 専門研修—写真測量・縄文時代遺跡調査・鉄器保存・埋蔵文化財情報・予備調査・環境考古, 特別研修—石造物調査の8課程と, 埋蔵文化財の材質・構造・保存・環境に関する研究会への参加)

全埋文協関東中部ブロック協議会(4月25日 千葉市) 3名

全埋文法人連絡協議会総会(6月27・28日 水戸市) 3名

全埋文法人連絡協議会研修会(10月17日 京都市) 3名

全埋文協関連中部ブロック協議会(10月25日 宇都宮市) 3名

上越新幹線・関越高速自動車道関連4県会議(10月29・30日 浦和市) 1名

関東甲信越静地区会議文化財担当職員共同研修会(テーマ:低湿地における発掘, 12月19・20日 静岡市) 3名

関東甲信越静地区埋蔵文化財行政担当者会議(11月21日・22日 長野市～塩尻市) 4名

条里制研究会(3月19日・20日 奈良市) 2名

日本考古学協会等関連学会(年間) 延約60名

埋蔵文化財関係(県外)施設視察見学(年間)約50ヶ所 延約100人

長野県教育センター研修(年間)12名 社会・理科・進路特活の3課程

長野県教育センター公開講座(年間)12名

夏期大学地理講座(8月7日～10日 甲府市) 1名

## (3) 普及活動(51頁参照)

## (4) 調査事業(中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査—長野県教育委員会からの委託)

- 1) 調査遺跡及び面積 松本市・塩尻市・豊科町地域内19遺跡, 242,335㎡
  - 2) 整理作業 岡谷市大久保B遺跡ほか7遺跡について実施。
- } (5頁参照)

## (5) 事業費

昭和60年度 991,239千円(人件費284,432千円, 物件費706,807千円)

## (6) 県内市町村及び団体の埋蔵文化財関連事業への協力

(発掘調査・整理・報告書作成協力指導, 市町村史誌編纂委員・同文化財審議委員委嘱, 遺物等の貸出, 講演会・報告会講師派遣等)

- 4・4 岡谷市教委(梨久保遺跡出土石器石質鑑定 小松宏昭)(61・1・29)
- 4・15 長野県史刊行会(考古資料篇編纂 樋口昇一)(8・17, 61・3・11)
- 5・11 中野市教委(市内詳細分布調査計画 田川幸生)(7・20, 61・2・3～4)
- 6・1 箕輪町教委(上の林・長岡新田遺跡調査指導 丸山尚一郎)
- 6・8と15 松本市西部公民館成人学級(「松本城を中心とした城・館」 中島経夫)
- 6・14 大町市教委(文化財審議委員会 樋口昇一)
- 6・22 飯田市教委(石行遺跡発掘指導 市沢英利)

- 7・11 塩尻市博物館協議会(樋口昇一)
- 7・13 三郷小学校P T A 総会(「三郷村の歴史」 百瀬新治)
- 8・3～4 穂高町教委(穂高町史編纂 樋口昇一)
- 11・21 更埴市教委(森將軍塚調査会議 宇賀神誠司)
- 12・20 中信農事試験場職員研修会(「塩尻市の原始・古代」 三上徹也)
- 12・25～26 檜川村教委(磐川考古館整備 百瀬忠幸)
- 1・13 塩安筑高校校長教頭研修会(「中央道長野線の発掘調査から」 樋口昇一)
- 1・21 塩尻市考える農業学習塾(「塩尻市の原始・古代」 三上徹也)
- 1・28 山形村教委(殿村遺跡報告書打合会議 百瀬忠幸)
- 1・29 飯田市教委(恒川遺跡調査会議 市沢英利・小平和夫)
- 2・6 岡谷市公民館歴史講座(「信濃の原始古代—中央道長野線の発掘調査から」  
中島A—三上徹也, 上木戸—唐木孝雄) 3・14 同(吉田川西—原明芳)
- 2・20 上田小県誌刊行会(同誌考古篇編纂について 樋口昇一)
- 2・22 塩尻市誌編さん会(編さん会議 百瀬長秀・樋口昇一)
- 2・8 松本市あがたの森公民館考古学教室(「中央道長野線の調査から」 樋口昇一)
- 2・23 塩尻史談会(「中央道長野線の調査から 樋口昇一)
- 2・20～21 高山村教委(北ノ久遺跡報告書刊行会議 綿田弘実)
- 2・22 駒ヶ根市教委(青木北遺跡出土遺物指導 百瀬長秀・平林彰)
- 3・15 大町市史編纂会(編纂委員会 樋口昇一)
- 3・24 日本銀行松本支店職員研修会(「松本平の原始古代文化」 樋口昇一)
- 3・24 檜川村教委(文化財保護審議会 百瀬忠幸)



吉田川西遺跡を視察する遺跡調査指導委員

役員及び職員

職 名	氏 名
理 事 長	村山 正(県教育長)
副 理 事 長	河原田幸雄
常 務 理 事	三村 忠幸
理 事	池田宗兵衛(県企画局長) 大澤 和夫(県考古学会長) 林 茂樹(考古学研究者) 小山 一郎(県高速道局長) 小野 光洪(塩尻市長) 宮下 哲(県教委文化課長) 奥村 秀雄(長野市教育長市町村教育長代表)
監 事	神野 久雄(県会計局会計課長) 萩原 秋夫(県教委総務課長)
事 務 局 長	西沢 宣利 山崎 昭三(60・7・4付転任)
総 務 部 長	堀内 計人
主 事	六川 直利 笠井 浩 宮越ゆり枝(60・10・31付退職)
調査第一部長	樋口 昇一
調査第二部長	丸山敞一郎
調査第三部長	春原 正毅
調査研究員	小菅 敏男 鈴木 道穂 春日 文彦 井上 城典 伊藤 友久 遠山 芳彦 斉藤 正善 唐木 孝雄 飯沼 潤 上田 典男 小松 宏昭 関 全寿 百瀬 新治 原 明芳 野村 一寿 百瀬 長秀 中島 経夫 市沢 英利 百瀬 久雄 綿田 弘実 青柳 英利 田川 幸生 岡沢 秀紀 石上 周蔵 近藤 尚義 金原 正 中村 千尋 北原 正治 田中正治郎 岡村 秀雄 三上 徹也 福島 厚利 小口 徹 馬場 長光 河西 克造 関 賢司 松田 青樹 小室 邦夫 平林 彰 寺島 俊郎 井口 慶久 小林 上 小平 和夫 市川 隆之 百瀬 忠幸 市村 勝巳 西牧 尚人 伊藤 隆之 黒岩 龍也 宇賀神誠司 望月 映 小松 望 小林 俊一 中野 亮一 大竹 憲昭 春日 雅博 高野 博正 和田 文人 寺内 隆夫
調 査 員	百瀬 陽三 尾川 秀吉



長野県埋蔵文化財センター年報 2 1985

発行日 昭和61年3月31日

編集発行 (財)長野県埋蔵文化財センター

〒399-07 長野県塩尻市広丘高出1977

TEL 0263-54-2150

印刷 中信凸版印刷株式会社